

県道船戸切幡上板線改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

土成前田遺跡

平成元年3月

徳島県教育委員会

序 文

本書は、県道船戸切幡上板線改良工事に伴い、昭和62年度に発掘調査を実施した土成町前田遺跡の調査報告書であります。

当遺跡からは、旧石器時代や縄文時代の遺物、さらには、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が発見され、地域の歴史の変遷を考える上での貴重な資料を得ることができました。

これらの成果をおさめた本書が、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、今後の研究の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際し、関係各位から賜りました多大の御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げまして、ごあいさついたします。

平成元年3月

徳島県教育委員会

教育長 松本 富夫

例 言

1. 本書は、県道船戸切幡上板線改良工事に伴って実施した土成^{ヌリノカタ}前田遺跡（徳島県板野郡土成町所在）の発掘調査報告書である。
2. 調査は徳島県土木部道路建設課の依頼を受けて、徳島県教育委員会文化課が実施した。
3. 調査は、昭和62年9月2日から昭和62年12月25日までの間に実施した。
4. 調査面積は約700㎡である。
5. 現地での調査に際しては、川島土木事務所・土成町教育委員会・楠重雄氏の御協力を賜ったほか、文化課の北原雅代氏には図面作成に御助力を賜った。ここに謝意を表する。
6. 遺物等の整理作業・報告書の作成作業は昭和63年1月～5月、昭和63年12月～平成元年1月の間に行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の実測、製図は各年度の調査員・補助員が分担した。遺構の写真撮影は主に福家が先行し、遺物については補助員の宮尾大・末永一路の協力を得た。
また、報告書作成の過程では、特に文化課の久保聡美朗・佐藤誠二・乾雅信各氏の御助力を賜ったほか、旧石器については岡山大学助手朝川一徳氏に御教示いただいた。明記して謝意を表する。
8. 本書の編集執筆は、執筆の一部を調査員の中村光男・乾雅信・実平理文・楠達二が分担したほかは福家清司が行った。調査員が分担した箇所には担当者の氏名を明記した。
9. 本書で用いる高度値は海拔高であり、方位は磁北を示す。
10. 遺物番号は土器・石器ごとに通し番号を付し、本文・挿図・表・図版と一致する。
11. 本報告にかかわる遺物・図面・写真等は一括して徳島県教育委員会文化課が保管している。

目 次

序文	徳島県教育委員会教育長 松本富夫	
第1章 位置と環境		13
第1節 地理的環境		13
第2節 歴史的環境		13
第2章 調査の契機と経過		17
第1節 調査の契機		17
第2節 調査の経過		17
第3節 調査組織		18
第4節 調査日誌抄		19
第3章 層序		23
第4章 遺構と遺物		27
第1節 旧石器時代の遺物		27
(1) 概要		27
(2) 包含層出土遺物		27
第2節 縄文時代の遺構と遺物		27
(1) 概要		27
(2) 遺構と出土遺物		29
(3) 包含層出土遺物		29
第3節 弥生時代の遺構と遺物		31
(1) 概要		31
(2) 遺構と出土遺物		32
(3) 包含層出土遺物		37
第4節 平安時代の遺構と遺物		44
(1) 概要		44
(2) 遺構と出土遺物		44
(3) 包含層出土遺物		49
第5節 中世の遺構と遺物		58
(1) 概要		58
(2) 遺構と出土遺物		58
(3) 包含層出土遺物		61

第5章 遺構と遺物の検討	63
第1節 遺構について	63
(1) 各遺構の検討	63
(2) 遺構の変遷	64
第2節 遺物について	65
(1) 弥生時代の遺物	65
(2) 平安時代の遺物	67
(3) 中世の遺物	69
第6章 まとめ	71
第1節 須恵器焼成窯について	71
第2節 製鉄について	71

搜 図 目 次

図 1	土成前田遺跡の位置	13
図 2	周辺の遺跡分布図	14
図 3	調査区割図	18
図 4	調査区土層図 (1)	24
図 5	調査区土層図 (2)	25
図 6	包含層出土旧石器実測図	27
図 7	遺構配置図	28
図 8	土坑 1 実測図	29
図 9	土坑 2 実測図	30
図 10	包含層出土縄文式土器実測図	30
図 11	土坑 3 実測図	31
図 12	土坑 3 出土遺物 (土器) 実測図	33
図 13	土坑 3 出土遺物 (石器) 実測図 1	34
図 14	土坑 3 出土遺物 (石器) 実測図 2	35
図 15	土坑 3 出土遺物 (石器) 実測図 3	36
図 16	包含層出土弥生式土器実測図	37
図 17	包含層出土遺物 (石器) 実測図 1	39
図 18	包含層出土遺物 (石器) 実測図 2	40
図 19	包含層出土遺物 (石器) 実測図 3	41
図 20	包含層出土遺物 (石器) 実測図 4	42
図 21	包含層出土遺物 (石器) 実測図 5	43
図 22	掘立柱建物跡実測図	45
図 23	柱穴出土遺物実測図	46
図 24	土器だまり平面図	47
図 25	土器だまり出土遺物実測図 1	48
図 26	土器だまり出土遺物実測図 2	49
図 27	包含層出土須恵器実測図 1	51
図 28	包含層出土須恵器実測図 2	52
図 29	包含層出土須恵器実測図 3	53
図 30	包含層出土須恵器実測図 4	54

图31	包含層出土須惠器・土師器実測図 5	55
图32	須惠器變拓影	56
图33	異形須惠実測図	57
图34	溝 1 土層図	58
图35	溝 1 出土遺物 (土器) 実測図	59
图36	溝 1 出土遺物 (石器) 実測図	60
图37	土坑 4 実測図	61
图38	包含層出土中世遺物実測図	61
图39	石炭法量分布図	66

表 目 次

表 1	出土遺物一覧表	65
表 2	土坑 3 出土弥生式土器観察表	73
表 3	包含層出土弥生式土器観察表	74
表 4	柱穴出土土器観察表	75
表 5	土器だまり出土土器観察表	75
表 6	包含層出土須恵器・土師器観察表	78
表 7	溝 1 出土土器観察表	88
表 8	包含層出土中世遺物観察表	90
表 9	石器計測値表	92

写 真 目 次

写真 1	作業風景 1	20
写真 2	作業風景 2	21
写真 3	作業風景 3	21
写真 4	作業風景 4	22
写真 5	イ区の土層堆積状況	26
写真 6	石礫出土状況	38
写真 7	羽口	62
写真 8	鉄滓	62

図版目次

- 図版 1 調査区全景
 (1) 調査前の状況
 (2) 調査終了時の状況
- 図版 2 遺構検出状況 (1)
 (1) 土坑 3 集石検出状況
 (2) 土坑 3 完掘状況
- 図版 3 遺構検出状況 (2)
 (1) 竪立柱建物跡 (遠景)
 (2) 竪立柱建物跡 (近景)
- 図版 4 遺構検出状況 (3)
 (1) 溝 1 完掘状況
 (2) 土坑 4 完掘状況
- 図版 5 遺構に伴う遺物の出土状況 (1)
 (1) 土坑 3 出土弥生式土器
 (2) 土坑 3 出土石包丁
- 図版 6 遺構に伴う遺物出土状況 (2)
 (1) 柱穴内出土土師器
 (2) 土器だまり出土須恵器
- 図版 7 包含層遺物出土状況 (1)
 (1) ナイフ形石器
 (2) 石鏃
- 図版 8 包含層遺物出土状況 (2)
 (1) 東壁沿いの遺物
 (2) 異形須恵
- 図版 9 出土遺物 (1)
- 図版 10 出土遺物 (2)
- 図版 11 出土遺物 (3)

本 文

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境 (図1・2参照)

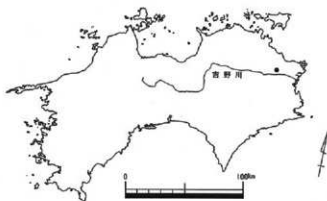


図1 土成前田遺跡の位置

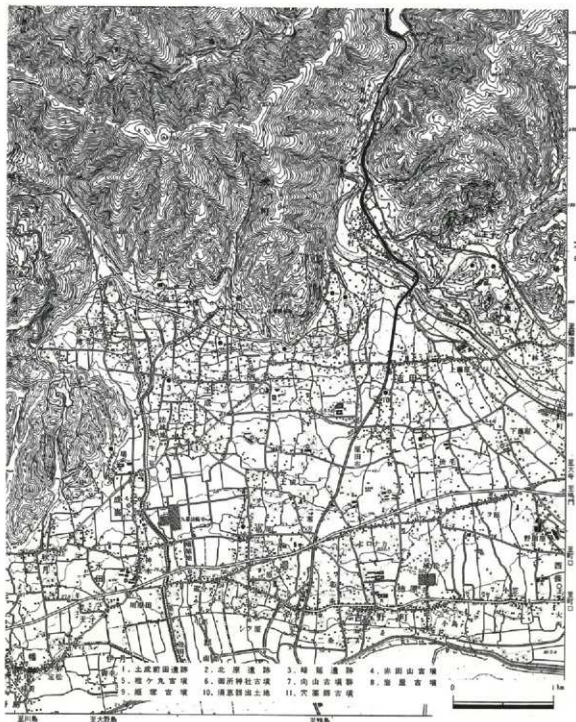
徳島県と香川県との境界をなす阿讃山地は、南北が断層線に限られた地盤山地であり、白亜系の和泉層群よりなっている。この和泉層群は一般に風化や河川の侵食に弱く、川は大量の土砂を流して、南麓には規模の大きな扇状地を発達させている。

土成前田遺跡はそうした阿讃山地の南麓に形成された扇状地と阿讃山地との境界線上に位置する遺跡で、現地表面の標高は約70~80mを測る。調査地点はゆるやかに南に向かって傾斜する地形上にあり、西側には谷(熊谷寺川)が流れる。現況は緩傾斜面を切り開いた棚田が広がっているが、調査区の大部分には、この熊谷寺川が押し出したとみられる砂礫層が厚く堆積しており、この斜面も熊谷寺川によって形成された小規模な扇状地とみることができる。しかし、調査区の東端部一帯はこの砂礫層の堆積が認められず、すぐ北側に位置する阿讃山地の支尾根末端部が舌状に延びる部分に当たると考えられる。今回の調査で、平安時代以前の遺構が検出されたのはこの部分であり、土層堆積は調査区の西側一帯とは著しく異なっていた。

(実平、一部福家加筆)

第2節 歴史的環境 (図2参照)

当遺跡周辺に位置する主要な遺跡を示したのが図2である。この図によると阿讃山地の南麓斜面には、北原遺跡・峰延遺跡・赤田山古墳・椎ヶ丸遺跡・御所神社古墳・向山古墳群・岩屋古墳・姫塚古墳・穴薬師古墳などがある。



(建設省国土地理院発行1/25000地形図「川島」を転載)

図2 周辺の遺跡分布図

時代別に概観すると、旧石器時代の代表的な遺跡としては椎ヶ丸遺跡がある。この椎ヶ丸遺跡は当遺跡とは至近距離にある遺跡で、早くからナイフ形石器などの旧石器が散布する遺跡として知られ、昭和58年には、当遺跡と同じ県道船戸切幡上板線の工事に伴って調査が実施されている。^(註1)

弥生時代のものとしては北原・峰延の両遺跡がある。北原遺跡は県営土成内陸工業団地の造成事業に伴って発見された遺跡で、昭和61・62年に発掘調査が実施され、弥生時代中期の多数の遺構・遺物が検出されている。峰延遺跡は吉野川北岸農業用水事業に伴って調査が行われた遺跡で、中心は平安時代から鎌倉時代にかけての時期であるが、弥生時代中期の良好な資料が出土している。^(註2)

古墳時代のものとしては、赤田山古墳・向山古墳群・岩屋古墳・姫塚古墳・穴薬師古墳があるほか、土成町字原田からも近年須恵器の杯・高杯・平瓶が出土しており、付近に古墳が所在したと推定される。^(註3)^(註4)^(註5)^(註6)

歴史時代のものとしては、前述の峰延遺跡から平安～鎌倉時代の建物跡が検出されているほか、図には示していないが、土成町高尾の法教田遺跡からも戦国期から近世初頭頃の遺構・遺物が見つっている。なお、御所神社古墳は県下最大級の前方後墳ともいわれるが、発掘調査を行ったものでないので、正確な規模・内部構造・時期などについては今後の検討課題として残されている。^(註7)^(註8)

以上述べてきたように、当遺跡周辺は旧石器時代から歴史時代にかけての豊かな歴史的環境を有している。当遺跡も調査以前の段階では古代の窯跡の存在が予想されたが、以下に詳述するように、調査の結果、旧石器から中世に及ぶ時期の遺構・遺物が検出された。今回の調査地点はいずれも遺構の中心部からはずれた形であったが、当地点において新たに縄文式土器片が出土したことや、弥生時代の遺構が見つかったこと、中世の製鉄に関連する遺物が豊富に出土したことなどは、当地域における新たな知見として位置付けられるものである。

(実平、一部福家加筆)

註記

註1) 天羽利夫・立花博「徳島県の遺跡」(『日本の旧石器文化』第3巻 1976年)。なお、当遺跡で採集されたナイフ形石器を中心とする旧石器の報告例としては高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」(『旧石器考古学』27、1983年)がある。

註2) 徳島県教育委員会『徳島県文化財調査概報』1978年。

註3) 徳島県教育委員会『土成町北原遺跡』1988年。

註4) 未報告。当遺跡については調査を担当した結城孝典氏の御教示を得た。

註5) 土成町『土成町史』1975年。

註6) 土成前田遺跡調査時に出土の連絡を受け、福家が確認した。遺物は同町教育委員会が保管し

ている。

註7) 未報告。当遺跡の調査は福家が担当したものである。

註8) 徳島県教育委員会『徳島県文化財調査概報』1978年。

第2章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

当遺跡の所在は、徳島県土木部による県道船戸切幡上板線の道路改良工事計画に伴って、文化課が依頼を受けて実施した昭和53年11月の精密分布調査の結果判明したものである。この時の調査では、今回の調査対象地点で多数の須恵器片の散布がみられたことが報告されている。この結果に従って、工事施工以前に調査を実施することが協議によって確認されていたため、昭和62年8月に土木部道路建設課より用地買収完了につき調査実施の依頼があり、同年9月に着手することとなった。

第2節 調査の経過

調査着手時点では、作物が作付けされている畑が3筆あり、調査区全面にわたっての調査は不可能であったため、調査区の東側半分をまず完了させ、次いで西半分に及び予定で着手した。調査にあたっては段々に造成されていた水田単位に着手したので、便宜的に水田毎に西側からア～カの地区名を付けた（図3参照）。

調査作業はまずウ・エ・オ区の表土・床土及び水田造成時の盛土の掘り下げから始めた。床土及び盛土を取り除くとすぐ遺物包含層となり、須恵器片が多数出土した。しかし、ウ区では包含層の下は多数の礫を含む層となり、谷の押し出しの堆積状況を示していた。この礫層上部より投棄されたとみられる多数の須恵器片が検出された。密集度は低い「土器だまり」として実測することにした。エ区では床土の下は須恵器を含む包含層はほとんどなく、弥生の包含層となる。しかし弥生の包含層は不安定で、多数の礫が混入しており、下層は礫層となる。ここでは遺構は検出されなかった。オ区も須恵器を含む包含層はかなり削平されていたが、東部では遺構面の残りは良好であった。西部ではウ区と同様の堆積がみられ、土器だまりが広がっていた。オ区の東部でまず炭化物の広がりが確認されたため、すぐ北側のカ区の表土・床土・盛土の除去を実施した。このカ区では水田造成による盛土が1m程に達しており、遺物包含層もほとんど削平を受けていない状態であり、遺物が多数出土した。特に調査区の東端にあたる箇所では多量の炭化物ないしは灰のために包含層は黒色となり、須恵器の焼成窯がすぐ近くにあることを示す状況であった。ここでは掘立柱建物跡を検出した。オ・カ区では弥生包含層の残りも良好と思われたので、第1遺構面終了後に掘り下げを行った結果、弥生期の遺構（土坑3）を検出した。また、テストトレンチ内から縄文式土器片が

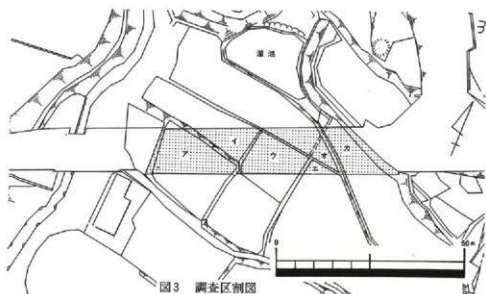


図3 調査区割図

出土したので、さらに掘り下げを行ったところ、二基の土坑（土坑1・土坑2）が確認された。さらに旧石器が上層の包含層に混入していたため、土層の安定していた当地区内で、4箇所深掘りを行い、旧石器の包含層の確認を試みたが、下層は雑混じりの不安定な層となり、湧水が著しい状態であった。

ア・イ区の調査は、作物の収穫が終わった11月4日から着手した。この両区ではウ区などでは削平のために認められなかった中世の包含層が残っており、中世の遺物・遺構（土坑4・溝1）を検出した。とりわけイ区では包含層が厚く、大量の鉄滓の出土を見た。須恵器を含む層は礫層となり、遺物の出土量も少なく、遺構も認められなかった。

現地での調査は12月25日にすべて完了し、引き続き出土遺物等の整理作業を3月末まで実施し、残りの分については昭和63年度に整理を行った。

第3節 調査組織

調査および整理作業にあたっての組織等は以下のとおりである。

昭和62年度（現地調査および整理作業）

総括	文化課長	梶田 務
	課長補佐	清水 博
	文化財保護班長	中田 正
	社会教育主事	後藤忠雄

庶務担当	庶務係長	天野尊温	
	主 事	大八木芳子	
調査担当	社会教育主事	福家清司	
	文化財調査員	中村光男	楠 達二
		乾 雅信	実平理文

昭和63年度（整理・報告書作成作業）

総 括	文化課長	三舟佑司		
	課長補佐	岡野嘉夫		
	文化財保護班長	河野良昭		
	社会教育主事	後藤忠雄		
庶務担当	庶務係長	天野尊温		
	事務主任	大八木芳子		
整理担当	社会教育主事	福家清司		
	文化財調査員	北原雅代	上田直樹	前川正人
		神例邦明	木村哲也	後藤田育秀

【調査作業参加者】

阿部 勝、大北定信、石川梅一、栗栖 勉、渋谷直一、飯田満俊、組橋園松、田村 明、上原義男、笠井義則、瀧川邦雄、赤沢フミコ、楠アキコ、森邦子、鈴田芳子、加納幸江、芝原竹子、大住良一、山村ヨシエ、松野フジエ、斎藤清重、納田康男、矢部洋三、本庄琴江、光永タチコ、渋谷武志、宮本武志、仁木浩志。

【整理作業参加者】（昭和62年度、昭和63年度）

原田夏実、森前美佐子、黄田浩二、本田春愛、谷 恵子、仁木浩志、木内富美子、谷公美子、宮尾 大、森 清治。

第4節 調査日誌抄

昭和62年

9月2日（水）晴

調査準備。資料のチェック、調査区の境界確認。

9月3日（木）晴

資材搬入し、調査開始。まず調査区の除草後、表土の剥ぎ取りを行う。

9月4日（金）晴

地形測量開始。排土置場がないために調査区内に土糞を積み、排土置場とする。

9月8日（火）曇時々雨

ウ・エ・オ各区で掘り下げ継続。灰色砂質土層を須恵器の包含層として把握する。水田床土、造成時の盛土から多数の須恵器片が出土する。

9月9日（水）曇一時雨

調査区の杭打ち開始。予想外に排土量が多く、排土置場の確保が困難となったため、調査区東側の一段高くなった道路予定地にベルトコンベアで上げることにする。

9月11日（金）曇

ついに排土置場が限界となり、作業続行不能となる。レベルを土成中学校内の三角点から移動する。

9月14日（月）晴

楠重雄氏の御好意により排土地が確保できたので作業再会。オ区の包含層掘り下げ。

9月19日（土）晴

ウ区の砂礫層より弥生式土器片出土する。

9月25日（金）晴

ベルトコンベア搬入。ようやく排土置場の問題が解消。オ区遺構確認作業に入る。

9月28日（月）晴

ウ区の礫層上面で検出した須恵器片を「土器だまり」として、写真撮影後実測開始。

10月5日（月）晴時々曇

ウ区の土器だまりの平面図完了。礫を取り除く、下部の遺構確認。オ区東部の包含層出土遺物の実測開始。

10月9日（金）晴

オ区東部の遺構確認を開始。比較的土層が安定しており、遺構の検出が期待できそうである。



写真1 作業風景1

10月13日（火）晴

カ区の包含層からナイフ形石器1点出土。

10月15日（木）曇

土成町教育長瀬尾氏から来訪。調査区東端部の包含層から分銅型の異形須恵製製品が出土する。

10月17日(土) 暴風雨

台風襲来につき、調査区全面冠水。調査区の上にある溜池が溢れる寸前まで増水し、土手の決壊が心配されたが、何とか持ちこたえる。



写真2 作業風景2

10月19日(月) 曇り

終日排水作業と土砂の取り除きに費やす。一部壁面が崩落している。オ区のテストトレンチの土砂を除去している時、縄文土器片1点出土。出土層位は確認できなかった。

10月26日(月) 雨

先週末から雨が続く。室内で遺物・図面の整理に終日費やす。

11月4日(水) 雨後曇

A区の作物の収穫が終わったので、調査区を設定し、明日より表土の剥ぎ取りにかかる。

11月5日(木) 晴後曇

A区表土剥ぎ取り開始。カ区で検出したピットの半掘開始。

11月6日(金) 曇

カ区のピットは計7個検出。約2m間隔で規則正しく並ぶ。さらに西側に延びる可能性もあり、検出を続行する。

11月10日(火) 晴

カ区の建物は最終的に2間×3間の規模となることを確認する。

11月13日(金) 曇

A区全面的に掘り下げ継続。全体に礫が多く、谷の押し出しが被っている状況である。カ区の遺構検出状況の写真撮影。来週より掘り下げの予定。

11月18日(水) 晴

カ区で第2遺構面の遺構確認を開始する。土坑とみられる落ち込みが想定されるが、プランは不鮮明。

11月19日(木) 晴時々曇

カ区で遺構が認められ箇所、さらに下層を確認するために掘り下げる。

11月21日(土) 晴

A区で谷状の流路を確認し、掘り下



写真3 作業風景3

げ開始（溝1）。カ区の弥生期と見られる遺構の掘り下げ開始（土坑3）。平板測量の追加。

11月25日（水）晴

カ区の掘り下げ部分で小土坑検出。時期は不明であるが弥生中期以前の遺構とみられる。作物の関係で最後に回していたイ区の調査を開始する。

12月3日（木）晴時々雨

土坑3から石・土器・石器などが検出される。図面作成を始める。イ区ではこれまでほとんど出土していない鉄滓・羽口などが多数出土し、特異な様相を示す。製鉄関連の遺構が想定される。陶磁器からみて時期は鎌倉期か。

12月10日（木）晴後曇

ア区の溝1掘り下げ続行。イ区で、中世の包含層除去後、小土坑を検出。鉄滓・炭・羽口などが出土した。カ区の土坑3平面図継続。土器・石を検出しながらの作業のため手間取る。



写真4 作業風景4

12月15日（火）曇

カ区の最終的な掘り下げを行ったところ、さらに土坑状の遺構を確認する（土坑2）。

12月22日（火）晴

調査区の壁面土層図の作成を継続して行うとともに平板測量の補足を行う。

12月24日（木）晴

最後まで残った土坑3も掘り下げ・図面を終える。調査終了写真を撮る。

12月25日（金）晴

資材搬出。周辺の挨拶回り等を終え、すべての調査を完了した。

第3章 層 序

今回の調査区はかつての傾斜面を棚田に造成した地点であるため、土層は極めて複雑な様相を示し、便宜的に水田単位に区割りした小地区単位でもほとんど同一の土層が認められないという状況であった。特に調査区の東部では水田造成時の削平が須恵器を含む包含層深くまで及んでいる箇所が多く、調査区壁面の土層や土層観察用のベルトの土層観察でも土層の相関関係を把握するのも困難な状況であった。

ここでは調査区全体の土層を一律に示すことができないため、調査区東壁と、北壁の一部、南壁の一部を図示して、説明を加えることにしたい。

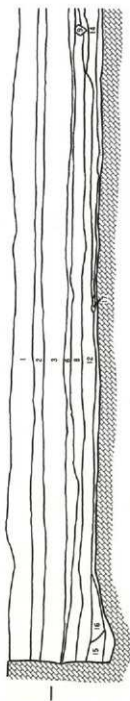
まず、図4の調査区東壁の土層図に基づいて、最も土層が安定した地区の層序をみることにする。第1層は表土で、現在の水田耕作土である。第2層は水田耕作土に伴う床土層。第3～7層は水田造成に伴う盛土である。第8層以下が人為的な攪乱を受けていない層である。第8層は暗褐色砂質土層で、粘性があまりない粒子の細かい土からなる。この層は本来灰色を呈する層であるが、ここでは炭化物・灰の混入のため全体に黒色味の強い色調となる。この層は須恵器の包含層である。この第8層を除去して、建物跡を検出した。

第12層は黒色粘質土層で、非常にしまりの良い土で、固い。この層からは弥生式土器片、サヌカイト片などが出土し、弥生時代の包含層として把握される。しかし、この層が残っている範囲はこの東壁に沿った部分だけである。この第12層を除去して土坑3を検出した。第14層はにぶい黄褐色粘質土である。当初はこの層から下は無遺物層と考えられたが、第14層上部には弥生時代前期以前とみられる土器の細片がごく少量含まれていた。第14層以下は色調は第14層とはほぼ同じであるが、全体に砂質が強くなるとともに、礫が多く含まれるようになる。第8層中に旧石器が1点含まれていたため、最終的に旧石器の包含層を確認するために、第14層を約50cm掘り下げたが、第14層上面から30cm程度掘り下げると東壁近く（調査区内では最もレベルが高い）でも湧水がみられ、旧石器の包含層は確認されなかった。なお、縄文時代の可能性が高いと判断した土坑1・2はこの第14層を10数cm掘り下げた面で確認したものである。

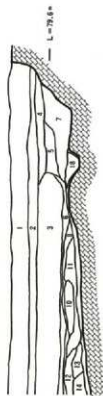
以上が、今回の調査区内では最も土層の状態が良好であった調査区東端部の層序である。

次に、調査区の西部にあたるア区の南壁土層図（図5-1）について説明を加える。ここでは中世の遺構である溝1が検出されている。

第1層は現在の耕作土、第2・3層は床土層である。第4～7層は中世の遺物を含む層であるが、遺物の出土は極めて少なく、むしろ須恵器片の出土が目立つ。第4層では拳大の礫が多く認められ、すぐ西側の熊谷寺川の押し出しによる堆積と考えられる。第9・10・15層



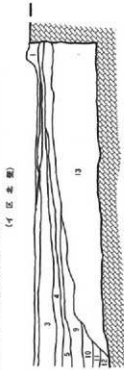
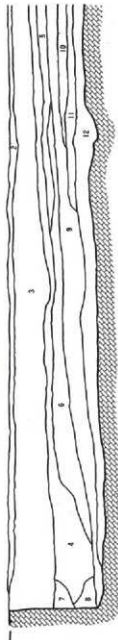
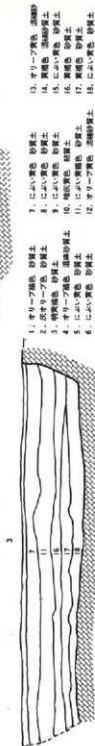
(分 区 重 疊)



- | | | |
|----------------|----------------|--------------|
| 1. 深褐色 砂質土 | 11. 深栗褐色 砂質土 | 16. 暗灰褐色 粘質土 |
| 2. 暗栗褐色 砂質土 | 12. 灰色 粘質土 | 17. 灰褐色 砂質土 |
| 3. オリーブ褐色 砂質土 | 13. オリーブ褐色 粘質土 | 18. 黄褐色 砂質土 |
| 4. 明栗褐色 砂質土 | 14. にぶい栗褐色 粘質土 | |
| 5. にぶい黄色 砂質土 | 15. 黄褐色 砂質土 | |
| 6. にぶい黄色 砂質土 | | |
| 7. にぶい黄色 粘質土 | | |
| 8. 暗褐色 砂質土 | | |
| 9. 浅栗褐色 砂質土 | | |
| 10. オリーブ褐色 粘質土 | | |

图 4 調査区土層図(1)





- 13. オリーブ褐色 湿砂
- 14. 黄褐色 湿砂質土
- 15. にんじん黄褐色 砂質土
- 16. 黄褐色 砂質土
- 17. 黄褐色 砂質土
- 18. にんじん黄褐色 砂質土

- 7. にんじん黄褐色 砂質土
- 8. にんじん黄褐色 砂質土
- 9. にんじん黄褐色 砂質土
- 10. 暗灰褐色 粘砂質土
- 11. にんじん黄褐色 砂質土
- 12. オリーブ褐色 湿砂質土

- 1. オリーブ褐色 砂質土
- 2. 灰オリーブ色 砂質土
- 3. 明黄褐色 砂質土
- 4. オリーブ褐色 湿砂質土
- 5. にんじん黄褐色 砂質土
- 6. にんじん黄褐色 砂質土

- 6. オリーブ褐色 湿砂質土
- 7. 明黄褐色 湿砂質土
- 8. 灰褐色 湿砂質土
- 9. オリーブ褐色 湿砂質土
- 10. オリーブ褐色 湿砂質土
- 11. オリーブ褐色 湿砂質土
- 12. 黄褐色 湿砂質土
- 13. 暗灰褐色 湿砂質土

- 1. 現在の耕作土
- 2. 盛土
- 3. 盛土
- 4. 褐色 湿砂質土
- 5. オリーブ褐色 砂質土



図5 調査区土層図(2)

は溝1の埋土である。この南壁部分では、溝1は規模が著しく小さくなり、深さも浅くなっている。第11層はにぶい黄褐色砂質土層で、溝1が掘り込まれた層である。この層には須恵器が少量であるが含まれる。しかし、この層を除去した第16層上面では遺構は検出されなかった。この第16層以下は熊谷寺川による洪水砂が堆積したものと考えられた。なお、A区の東部一帯は拳大から人頭大の砂岩礫が多く含まれる層が厚く堆積していたが、この礫層にあたるのが、第12・13層である。遺物はほとんど出土しない。

最後に、調査区内ではただ1箇所中世の遺物が多く含まれる土層が残っていたイ区の土層について、北壁土層図(図5-2)にしたがって説明を加える。

第1層は現在の耕作土で、上部が表土・下部が床土にあたる。第2・3層は水田造成時の盛土で、地形上西に向かって厚さを増す。盛土を除去した下層から多数の鉄滓・羽口が出土したが、その密度が高いのは第9~11層である。全体にオリーブ褐色を呈する砂質土層で、礫の混入が見られる。第13層は隣接するウ区から続く混雑砂質土層で、拳大から人頭大以上の礫が多数混入し、谷の押し出しによって堆積した層とみられる。上部には流れ込みとみられる須恵器片が少量含まれる。第12層はこの地区で検出された唯一の遺構である土坑4が掘り込まれた層であり、全体に砂質が強く、しまりが悪い層で、水の浸透が認められた。



写真5 イ区の土層堆積状況

第4章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代の遺物

(1) 概要

当遺跡から出土した最古の遺物に旧石器がある。この旧石器は遺構および該期の包含層に伴うものでなく、カ区の須恵器の遺物包含層から出土したものである。須恵器を包含する層から旧石器が出土し、下層に旧石器時代の包含層が存在する可能性も考えられたため、比較的土層の安定する地点を中心に確認のためのグリッドを設定して掘り下げを行ったが、包含層は確認することはできなかった。したがって、この旧石器は隣接する位置関係にある、旧石器の散布地として知られる椎ヶ丸遺跡などから混入した可能性が高いと考えられる。

(2) 包含層出土旧石器 (図6、図版7)

1はサヌカイトの横長剥片を素材とするほぼ完形のナイフ形石器で、長さ5.5cm・最大幅1.8cm・厚さ0.7cm・重さ5.3gを測る。左面は大きく2枚のネガティブな剥離面によって構成される。左縁上方は剥離面を残すが、下方は急角度の調整剥離を留める。右縁は急角度の調整剥離痕を留める。右面はポジティブな1枚の剥離面によって構成される。石器長軸と平行に細かい石理が認められる。全体に風化が顕著で、色調は灰白色を呈する。

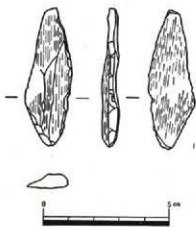


図6 包含層出土旧石器実測図

第2節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

土層観察のために設定したウ区とオ区のテストトレンチから縄文式土器の破片が数点出土した。出土層位はウ区が須恵器包含層下の混雑層、オ区が調査区東部の第14層にあたる土層とみられるが、安定した該期の遺物包含層としては認定し難い層である。しかし、弥生中期の遺構面をさらに10数cm掘り下げた面で検出した2基の土坑は、縄文式土器の可能性があ

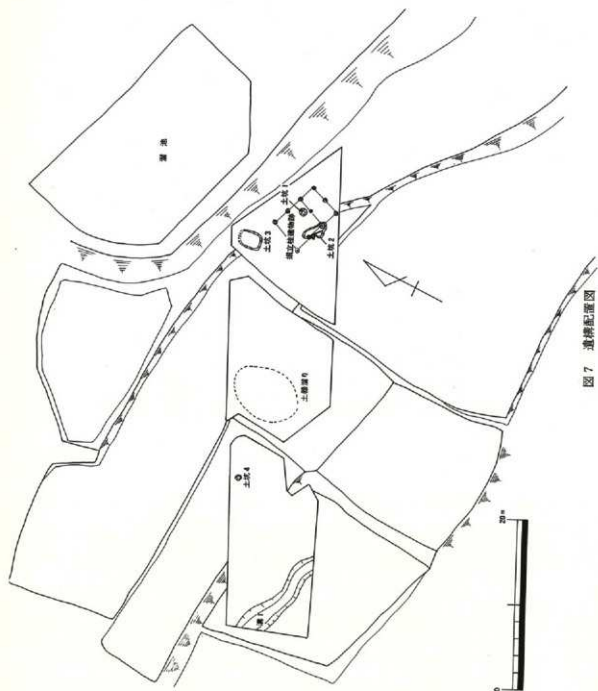


圖 7 遺跡配置圖

る細片が少量出土していることから、該期の遺構となる可能性がある。この土坑は時期を特定し得る遺物はないが、少なくとも検出した層位と遺物から弥生前期以前の遺構であることは確実とみられる。

(2) 遺構と出土遺物

①土坑1 (図8)

弥生時代中期の遺構面を10数cm掘り下げて検出した。平面プランは不整形で、規模は長さ約1.2m・幅0.7m・深さ0.4mである。埋土は、やや粘性のある砂質土で、風化した砂岩を含む。

出土した遺物は量的には少ないが、縄文と思われる土器の細片・石鏃1点・サヌカイト片などが出土した。時期を特定し得る資料に恵まれないが、出土した土器片が、上層で認められる弥生中期のもの明らかに異なること、テストトレンチなどから出土した縄文式土器と同じ暗褐色系の色調で、胎土に粗砂が多く含まれていることなどから、縄文時代に属する可能性が高い。

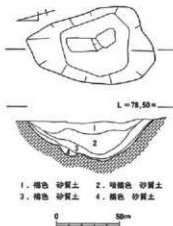


図8 土坑1 実測図

②土坑2 (図9)

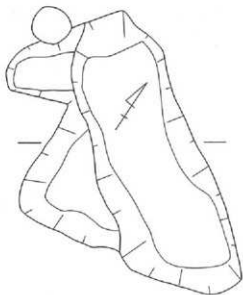
土坑1と同一面で検出した土坑で、調査区東端部で建物跡が検出された地点の下部に位置する。平面形は不整形を呈しているが、2～3の土坑が重複したか、肩が崩壊したために不整形となったもので、もともとは長方形のプランをもつ土坑であったとみられる。長軸2.3m・短軸1m・深さ0.8mを測る。底面はほぼ平坦で、長軸1.8m・短軸0.5mである。埋土は褐色砂質土であるが、粘性がある。埋土には部分的に炭が多くみられた。

出土遺物は遺構の規模に比して少なく、土器片とサヌカイト片が若干出土したのみであり、図示可能なものはない。土器片はいずれも色調・胎土から見て、縄文式土器の細片と思われるものであるが、文様・形態等で時期が特定できる資料はない。

(3) 包含層出土遺物 (図10)

1は9cm×6cmの破片で、外面に縄文が施される。器形については細片のため正確には不明であるが、深鉢形土器と考えられる。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれる。

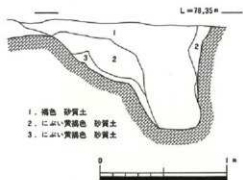
2は7cm×6cmの口縁部破片である。ゆるやかな山形状の口縁となっており、浅鉢形土



器となるものであろう。摩耗ないしは器面剥落のため調整・文様等は不明である。色調は暗褐色で、胎土には砂粒が多く含まれている。

ともに年代については細片のため特定し難いが、後期のものである可能性が高い。

以上のほかにも縄文式土器の色調と類似する土器片があるが、細片のため図示し得なかった。



- 1. 褐色 砂質土
- 2. に近い黄褐色 砂質土
- 3. に近い黄褐色 砂質土

図9 土坑2 実測図

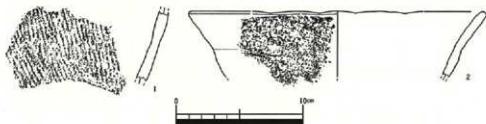


図10 包含層出土縄文式土器実測図

第3節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 概要

弥生時代の明瞭な包含層が確認されたのは調査区の東端部のみで、その範囲は極めて狭い。この弥生の包含層が認められた地点は調査区内では最も山寄りの地点で、レベルも最も高い地点である。この地点以外にも少量の弥生式土器の破片が出土しているが、安定した包含層とはいえ、出土点数も極めて少ない。

弥生包含層は全体に黒褐色を呈し、極めて良くしまつて固いが、層厚は厚い箇所でも10cm前後であった。この包含層を除去して検出した遺構は土坑1基のみである。

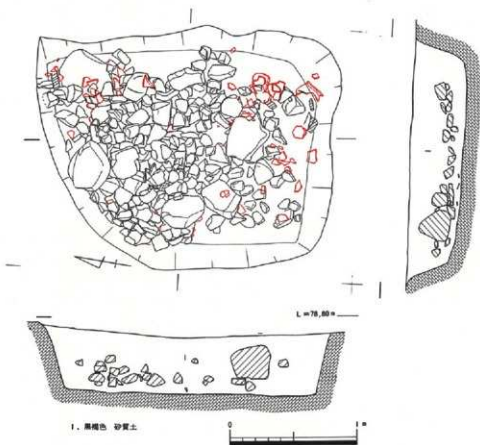


図11 土坑3 実測図

(2) 遺構と出土遺物

①土坑3 (図11~15、表2、図版2・5)

調査区北東部に位置し、平面プランは主軸をほぼ南北にとる不整形であり、長軸2.3m・短軸2mを測る。断面の形状は幅広のU字形で、底面はほぼ平坦で、深さは中央部で0.4mほどである。埋土は黒褐色の粘性のやや強い砂質土の単一層であり、風化した砂岩を含む。

内部には石が多数埋まっていたが、この石は、土坑の南側などを除いて0.1~0.2mほどのものがほぼ全面に広がっており、0.3~0.4mほどの大形の石は、基底部で円を描くように並んだ状態で検出された。この石はおそらく意図的に配置されたものと思われる。これらの石の一部や土坑壁面の一部には火を受けた痕跡があり、埋土からも炭や炭化材などが検出されたことから、目的は不明であるが、土坑内で火がたかれたと考えられる。

出土遺物には、弥生式土器の甕形土器・壺形土器・鉢形土器の口縁部・胴部・底部片のほか、石包丁・石鏃などがある。

(土器)

3・4は壺形土器の口縁部破片である。3は口径11.8cmを測り、直立する頸部から大きく外反する口縁部にかけての破片である。口縁端部を上下に拡張し、端面に2条の弱い凹線が施される。色調は淡褐色で、胎土には最大5mmの粗砂が含まれる。4は頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口縁端部を上方に積み上げる形態のもので、口径15.0cmに復原される。口縁部にはヨコナデが施されるが、頸部内外面には縦方向のハケ目が施される。胎土はやや粗く、最大3mmの砂粒が認められる。

5~7は甕形土器である。5は土坑内から出土した土器の中では最も遺存状態の良いものである。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上下に拡張して、端面に弱い2条の凹線を施している。体部はゆるやかに内湾し、全体に器肉を薄くつくる。調整は口縁部はヨコナデで仕上げられるが、体部外面には縦横の細かいハケ目が施されている。色調は赤褐色を呈し、胎土には粗砂が少量含まれている。6もほぼ同様の形態であるが、口縁端部の拡張は少なく、凹線も明瞭でない。7も口縁部が「く」の字状に屈曲するが、口縁部は極めて短く、端部の拡張が著しい。幅広い端面には2条の弱い凹線が施される。この個体には体部外面のハケ目は認められず、ナデで仕上げられたものとみられる。

8~12は底部の破片である。このうち、8~10はいわゆる上げ底の底部である。9は全体に器肉が薄い製品で、底部は平坦である。底部外面・体部外面は丁寧なナデにより器面が平滑に仕上げられ、体部内面にはヘラケズリが施されている。赤褐色を呈し、胎土も比較的精良である。10は底部の器肉が厚いもので、体部外面にはヘラミガキが施されている。

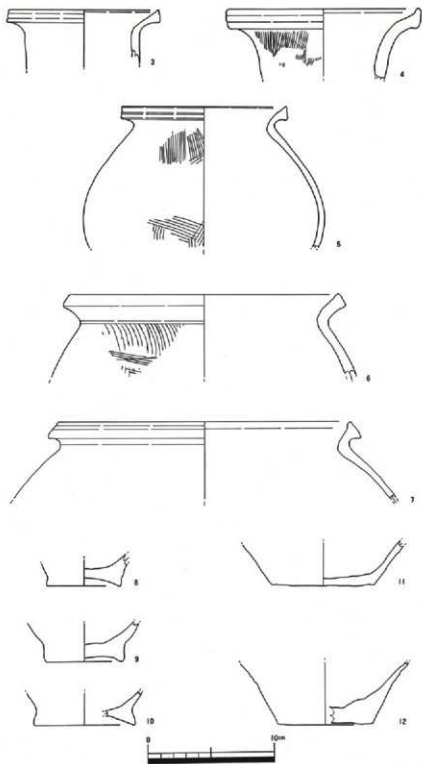


图12 土坑3出土遗物(土器)实测图

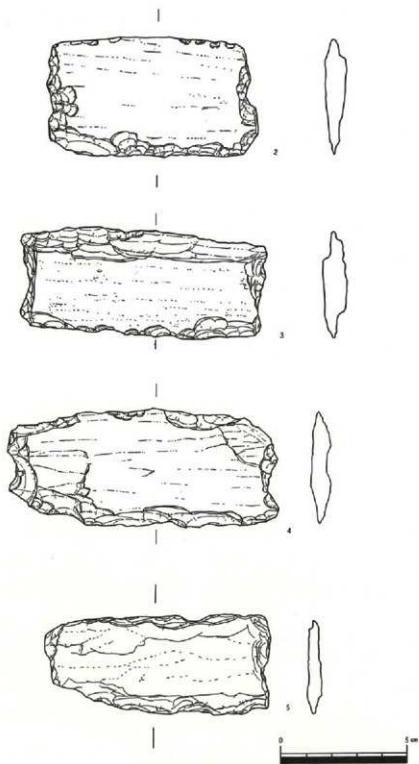


图13 土坑3出土遗物(石器)实测图1

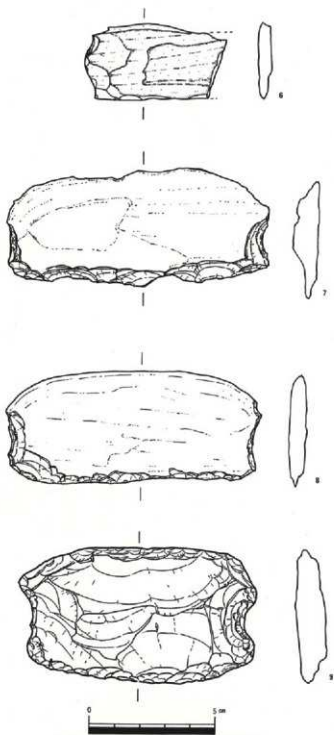


图14 土坑3出土遗物(石器)实测图2

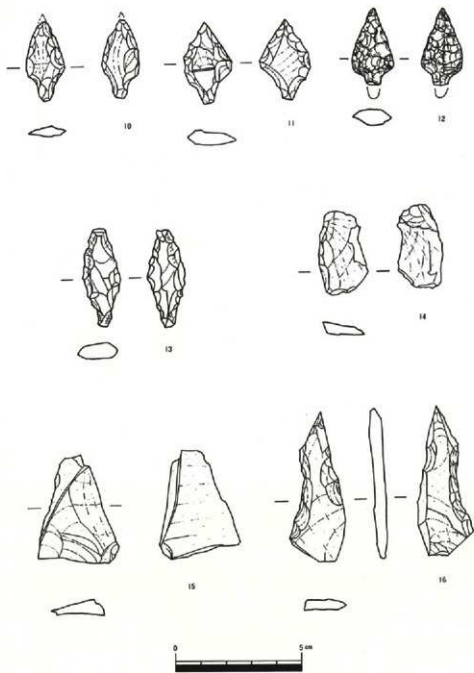


图15 土坑3出土遺物(石器)実測図3

(石器)

次に石器であるが、とりわけ打製の石包丁の点数が多い点の特筆される。

2～9は打製の石包丁である。このうち、9がサヌカイト製であるほかはすべて結晶片岩製である。結晶片岩製の石包丁は6以外は完形品である。計測値は長さ8.0～10.7cm、幅4.0～5.1cm、厚さ0.5～1.1cmの間に分布する。板状に剥離した結晶片岩の四方に調整痕を留めるもの(2～5)と三方に調整痕を留めるもの(7・8)がある。いずれも左右両縁には程度の差は認められるものの明らかな快り調整が施される。9のサヌカイト製のものは丁寧な調整が加えられた製品で、上下両縁に刃部が付けられている。左右両縁には明瞭な快り調整が施される。

10～13は石鏃である。いずれも有茎のもので、材質はサヌカイトである。このうち12は特に丁寧な調整が加えられた製品である。

14～16はサヌカイトの剥片である。

以上の遺物のほかに水差し形土器の把手とみられる遺物も出土した。

(中村、一部福家加筆)

(3) 包含層出土遺物(図16～21、表3)

弥生時代の遺物包含層は全般に薄く、包含層出土遺物のうち、土器は小片が多く図示可能なものは比較的少ない。しかし、石鏃は調査区全体から多数出土しており、未製品等も含めて多数図示した。

(土器)

13～15は底部の破片である。13はやや上げ底気味のもので、底部中央部の器内は薄い。調整は器壁剥落のため不明である。胎土には微砂粒が含まれている。底径は6.8cmに復原される。14は須恵器の土器だまり近くの隙層から出土した底部破片で、底径は7.7cmを測る。平底の底部で全体に器内は薄手である。色調は橙色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれる。15も底部破片であり、底径9.4cmに復原される。底部は平底。体部は部分的にしか遺存しないが、外面に

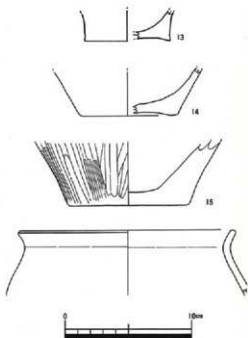


図16 包含層出土弥生式土器実測図

は縦方向のヘラケズリが施された上に、部分的に縦方向のハケ目が認められる。底部外面はナデによって平滑に仕上げられる。色調は赤褐色で、部分的に焼成不良により黒色を呈する。胎土はやや粗く、最大3mmの砂粒が含まれる。

16は甕の口縁部である。口径16.7cmに復原可能な個体で、口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を丸く仕上げる。調整は口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリとみられる。色調は褐色で、胎土はやや粗い。

(石器)

包含層出土の石器としては石鏃・石包丁・石錐・剥片などがある。

17～75は石鏃およびその未製品とみられるものである。石鏃の形態としては茎の有無によって大きく有茎のものと無茎のものに分けることができる。

17～26は有茎のものである。このうち、17・19はいわゆる柳葉形のもので、他は凸基式のものである。この有茎のものは後に述べる無茎のものに比べると全体に大形品が多い上に、調整も丁寧な製品が多い。

27～75のものは無茎のものであるが、このうち27～58は平基式で、他は凹基式のものである。平基式のものにはやや大形のもの(56など)もあるが、全体に小形品が多い。平基式・凹基式ともに細部の形状ではバラエティーに富む。

76～78は石包丁とみられるが、78はやや不明確である。いずれもは結晶片岩製であるが、78はいわゆる青石を素材とするものであり、全体に研磨が施されており、石包丁としてはやや特異である。

79はサヌカイト製の製品で、削器かとも推定されるが不明確である。左面には全面にわたって調整剥離が施され、右縁にはやや急角度の調整剥離によって刃部を形成する。右面左縁部には自然面を残す。

80はサヌカイト製の石錐とみられ、錐部は古く欠失する。



写真6 石鏃出土状況

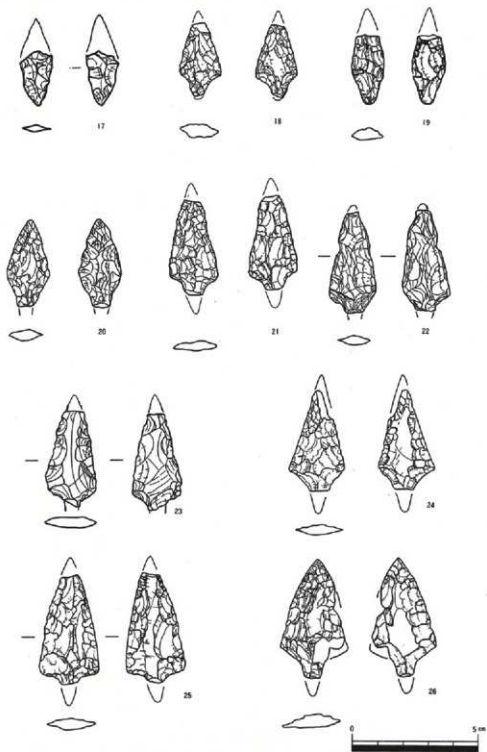


图17 包含层出土遗物(石器)实测图1

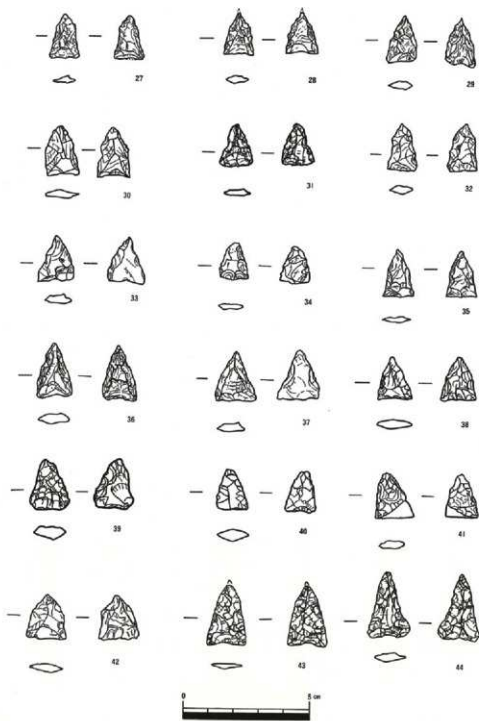


图18 包含层出土遗物(石器)实测图2

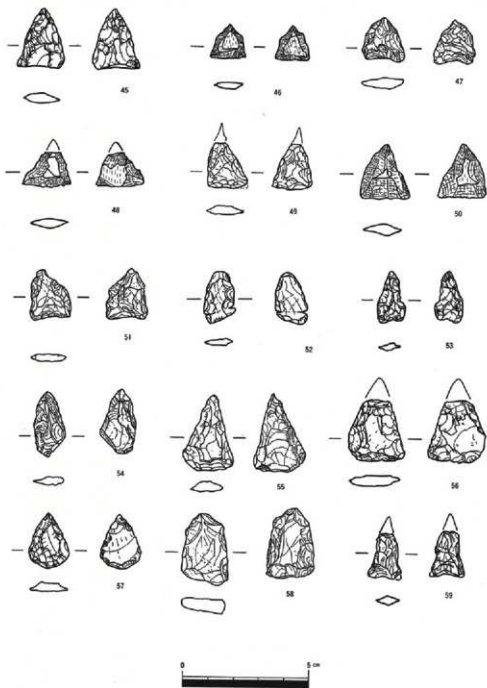


图19 包含层出土遗物(石器)实测图3

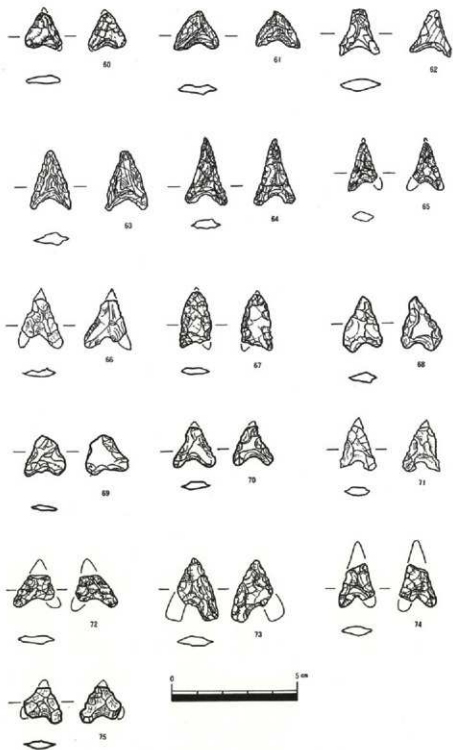


图20 包含層出土遺物(石器)実測図4

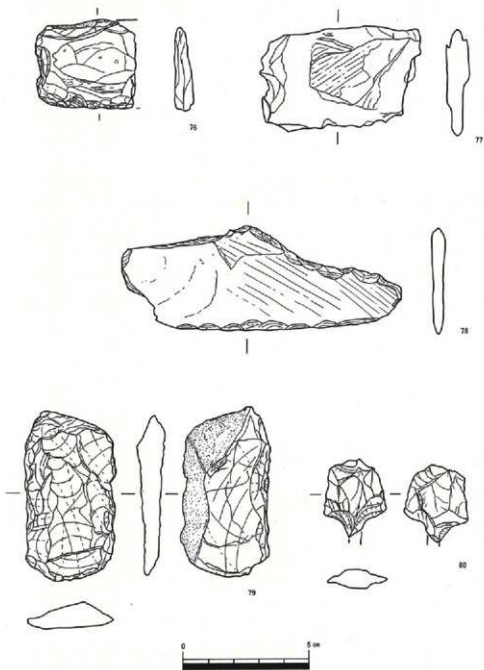


图21 包含层出土遗物(石器)实测图5

第4節 平安時代の遺構と遺物

(1) 概要

当遺跡は調査に着手する時点では表面採集で多数の須恵器片が採集されていたことから、須恵器を伴う時代の遺跡と推定されていた。調査が進むにつれて、他の時代の遺構・遺物が検出されて、複合遺跡であることが明らかになったが、遺物全体の中ではやはり須恵器の量が圧倒的に多く、須恵器を伴う時代が当遺跡の中心であることが改めて確認される結果となった。

しかしながら、須恵器は調査区全体から多数出土するものの、この時期に伴うとみられる遺構は調査区の東端部に検出された掘立柱建物跡1棟のみである。このほかに本書では、障層から検出された一群の土器を「土器だまり」として把握して、遺構に準じる形で掲載したが、この土器は厳密には遺構出土遺物としては把握できないものである。

なお、包含層は調査区の「土器だまり」を境として東側一帯に厚く、遺物の密度も濃密であったが、西側は障層が多く、明瞭な包含層は認めることはできない状況であった。「土器だまり」の東側一帯も水田の造成によって包含層が削平されている箇所が多く、最も残りが良かったのは包含層を削平せずにさらに1m以上の盛土によって水田を造成していた最も山寄りの地点である。しかし、この部分の面積は極めて狭いものであった。この部分では包含層全体が多量の炭化物・灰の混入によって黒色に近い色となっており、地形的な条件や出土遺物の特徴から考えて、須恵器焼成窯に伴う灰原の東端部と考えられる。

(2) 遺構と出土遺物

①掘立柱建物跡(図22・23、表4、図版3・6)

調査区東端より、北西方向に延びる南北2間×東西3間(4m×6.4m)の建物跡が検出された。柱穴は、径29~51cm、深さ13~57cmの比較的しっかりしたものである。浅い柱穴はテストレンチなどによって削平を受けたものである。柱穴間の距離は1.86~2.30mとややばらつきが認められる。棟方向は北を基軸とすると約60°西に振っている。なお、西側中央部の柱穴はもともとなかったものとみられる。

出土遺物としては柱穴から土師器の杯、須恵器の杯・甕などが出土した。

17・18は土師器の杯である。17は口径11.5cm・器高3.4cm・底径7.8cmを測る。体部・口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部を丸く納める。底部はヘラ切りで、底部外面以外は回転ナデで仕上げる。18は口径11.9cm・器高5.2cm・底径7.7cmに復原される。体部・口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。底部はヘラで切り離した後にナデを施す。口縁部・体部もナデで仕上げられる。全体に器肉薄く、丁寧な作りで

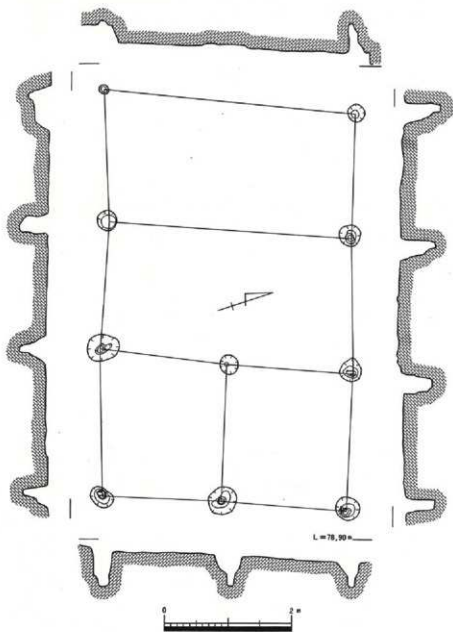


图22 掘立柱建物跡実測図

ある。色調は黄褐色で、胎土は比較的精良である。

19は須惠器の高台付きの杯である。体部から口縁部にかけては直線的に斜め上方に延び、端部を尖り気味に収める。高台は断面方形で低い。調整は全体にロクロ回転によるナデで仕

上げられている。20
は須恵器の高杯の脚
部破片とみられる。
脚径は14.3cmに復
原される。
(楠、一部福家加筆)

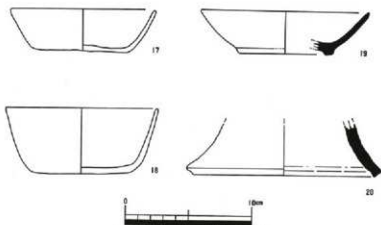


図23 柱穴出土遺物実測図

②土器だまり (図24～26、表5、図版6)

ウ区と隣接するオ区にかけては人頭大の角礫を多数含む砂礫層が帯状に広がっていたが、この砂礫層の中から多数の土器片が出土した。この土器片は谷状の地形となっていたこの部分に投棄されたとみられるものである。検出した土器の大半は須恵器であるが、比較的目立つ器形としては杯身・杯蓋がある。また甕の破片も少なくないが、図示できるものはほとんどない。これらの須恵器の多くは焼成不良品で、調査区の近くで営まれたと推定される須恵器焼成窯の不良品等を廃棄した可能性が高い。以下、図示した遺物について簡単に説明を加える。

図示した遺物はすべて須恵器である。21～33は杯蓋である。このうち29～33は天井部中央部を欠失するために不明であるが、天井部が残る21～28はいずれも摘みが付くタイプのものである。その形態から考えて、天井部を欠くものも本来は摘みを持っていたと考えて間違いないであろう。摘みはいずれも退化傾向の著しい扁平なものであるが、22は本来の宝珠形の形態の名残を留めるものである。天井部は大半が平坦であるが、わずかながら丸みを持つものもある(27・30)。口縁部の形態は天井部からゆるやかに下るものがほとんどを占める。口縁端部はいずれも下方に小さく摘み出し、やや尖り気味か、丸く仕上げる。調整はいずれもロクロ回転を利用したナデで仕上げられる。分量については破片のものばかりであるため、やや正確さに欠けるが、口縁部が残る28～33は12.2～22.7cmの間に口径が分布する。胎土は比較的精良であるが、2～3mmの砂粒を少量含むものもある。なお、比較的焼成良好なものは灰色であるが、焼成不良なものは灰白色ないしは黄灰色を呈する。

34～46は杯身である。このうち、34～38は底部欠失により高台の有無は不明であるが、39・40は無高台、41～46は高台が付く。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に斜め上方に延

びるものと、口縁部がやや内湾するもの、さらにやや外反するものが認められる。高台は断面方形のもの、台形状のもの、逆台形状のものがあるがいずれも低いものである。色調・胎土・焼成の特徴については杯蓋とほぼ同様である。

47は壺とみられ、肩部が張り出す形態のも

のである。全体の形状については不明である。

48・49は口縁部が「く」の字状に屈曲する甕の破片で、48は23.0cm、49は24.5cmに復原される。48は口縁部内外面に回転ナデ、体部外面に格子目ないしは平行線状の叩き目を施す。49の体部内面には青海波文が残る。いずれも焼成不良の製品である。

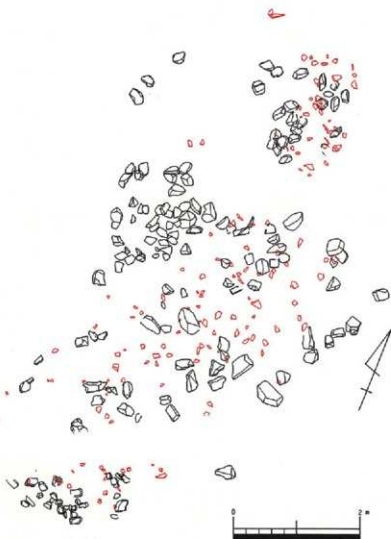


図24 土器だまり平面図

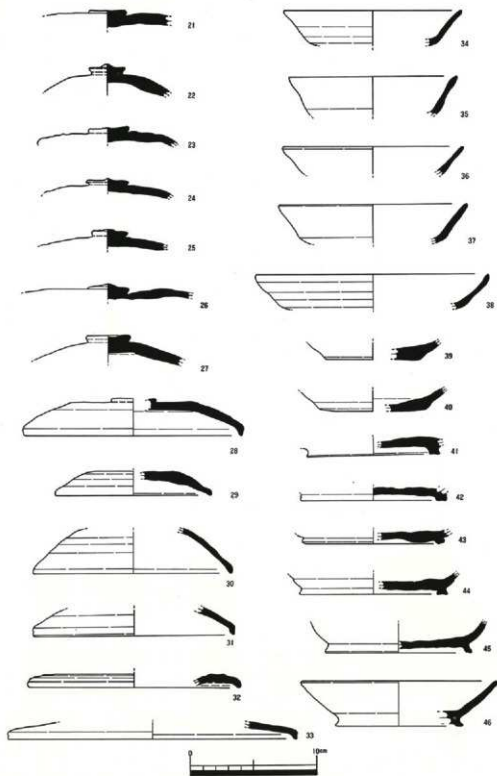


図25 土器だまり出土遺物実測図1

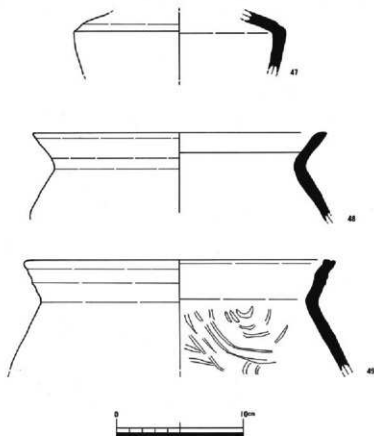


図26 土器だまり出土遺物実測図2

(3) 包含層出土遺物 (図27~33、表6、図版8・10)

須恵器を含む土層は調査区東半分で認められた灰色砂質土層より上部の層で、水田造成時に盛られたとみられる盛土やその上部の水田床土層からも比較的多数の須恵器が出土した。ここでは灰色砂質土層出土遺物に加えて、時期的に懸隔がないと判断されるものについては盛土層・床土層出土のものも一部図示した。

須恵器を含む包含層出土遺物として図示したのは、須恵器が大部分で、須恵器以外のものとしては土師器2点と土錘2点の計4点のみである。

須恵器には杯蓋・杯身・皿・壺・鉢・甕などがあるが、杯蓋と杯身が大部分を占める。

50~77は杯蓋である。このうち、天井部の中央部が遺存するものはすべて摘みが付く(50~64)。摘みは乳頭状の小さい摘みである60以外はいずれも偏平であるが、摘み中央部が盛り上がるものと逆になかくぼみのもの、平坦となるものなどがあり、細部ではそれぞれ個体差が認められる。また、摘みの径は1.8~3.5cmの間に分布する。

天井部が残るものは大半が平坦であるが、なかには中央部がわずかにくぼむものもみられる。口縁部は天井部からゆるやかに下方に延びるものが大半であるが、66・67のように急激に屈曲する形態のものも少数認められる。また、85は小形の製品であるが、天井部から口縁部にかけての面がゆるやかなS字状を呈しており、やや特異な形態を示す。65～67の3点は杯蓋以外の可能性もある。口縁端部はわずかに下方に積み出すものが大半を占めるが、端部付近をS字状に屈曲させるもの(85・72)や積み出しがさほど目立たないもの(74・75)も認められる。口径はいずれも細片のためやや不正確であるが、復原値は9.4～20.0cmと大小がある。最も多数を占めるのは13～16cmのものである。調整はいずれも回転ナデによる。

78～107は杯身である。このうち全体の形状が知られるのは78～80の3個体のみである。78は直線的に急激に立ち上がる体部がやや外反する口縁部に続く。79は体部下部下で大きく上方に屈曲し、ほぼ直線的に立ち上がる。断面逆台形状の低い高台を削り出す。口径13.7cm・器高4.6cm・高台径8.5cmに復原される。また、80は底部から体部の器肉が厚い個体で、体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げている。高台は台形状を呈する。口径14.4cm・器高4.3cm・高台径9.3cmに復原される。

81～91は体部から口縁部にかけての破片で、高台の有無については明確でない。体部から口縁部の形態は直線的に斜め上方に延びるもの、口縁部がわずかに外反気味のもの、やや内湾気味のものがある。口径は復原値であるが10.1～17.8cmの間に分布する。

92・93は無高台の杯身と考えられるが、全体の形状は明らかでない。

94～107は高台部ないしは高台部から体部下部下にかけての破片である。このうち98は盤の可能性も残る個体である。いずれも高台は低いが、やや外方に踏ん張る形態のものもみられる。高台径も復原値であるが、7.4～14.6cmの間に分布する。

108・109は皿である。108は体部・口縁部直線的に斜め上方に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。小片であるが口径14.1cm・器高1.9cm・底径11.5cmに復原される。底部の切り離しは不明瞭であるが、ヘラによって切り離した可能性が高い。109もほぼ同様の量量・形態であるが、体部から口縁部にかけての器肉はやや厚く、口縁部がわずかに外反気味である。調整は108・109とも回転ナデを施す。110は盤とみられるが明確でない。高台径が14.8cmに復原されるやや大形品である。

111～119は壺とみられる。いずれも破片で全体の形状が明らかになるものはない。111は口縁部が大きく外反する。112・113・118・119は底部から体部下下部にかけての破片で、いずれも器肉が厚く、高台が付く。高台は119以外はいずれも低いものである。114～117は口縁部の破片である。114は小形の壺とみられ、口縁部は大きく外反する。115・116は大きく外反する口縁部の端部を上方に積み上げて尖らせる。117は口縁部が「く」の字状に大きく屈曲する形態で、端部は平坦面を形成する。

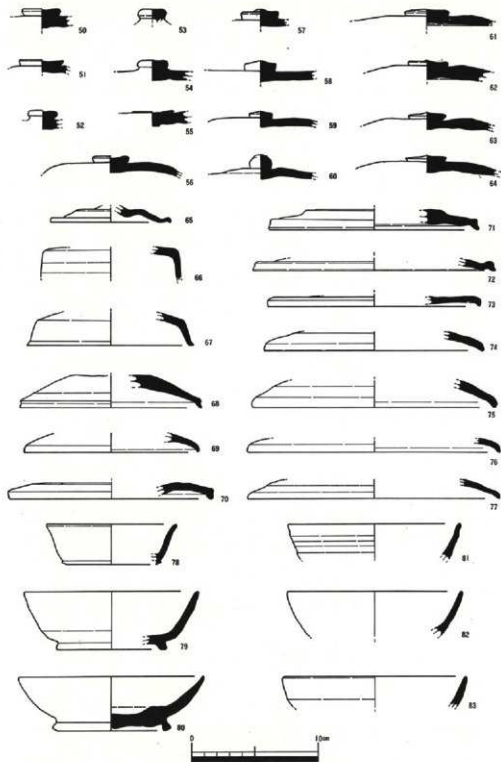


图27 包含层出土须惠器实测图1

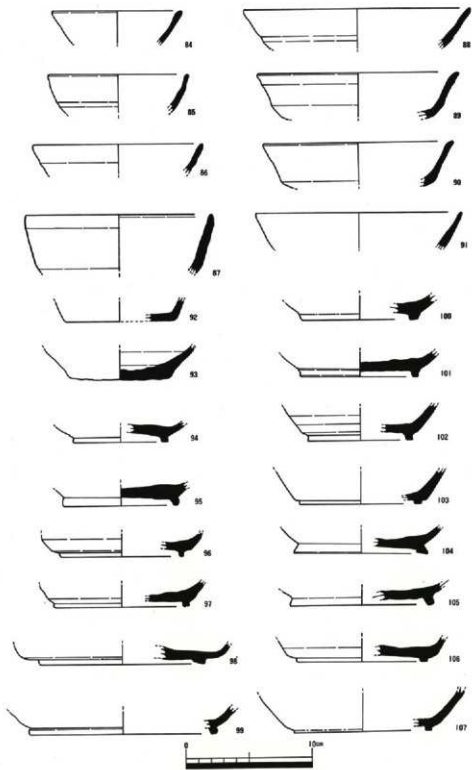


图28 包含层出土须惠器实测图 2

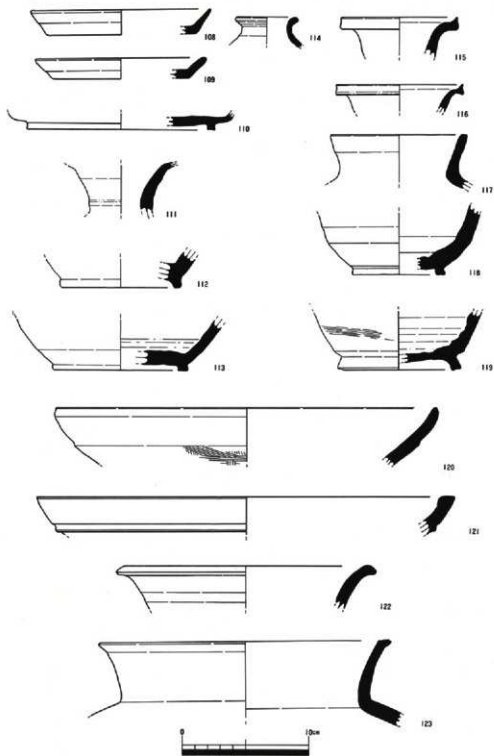


图29 包含层出土须惠器实测图3

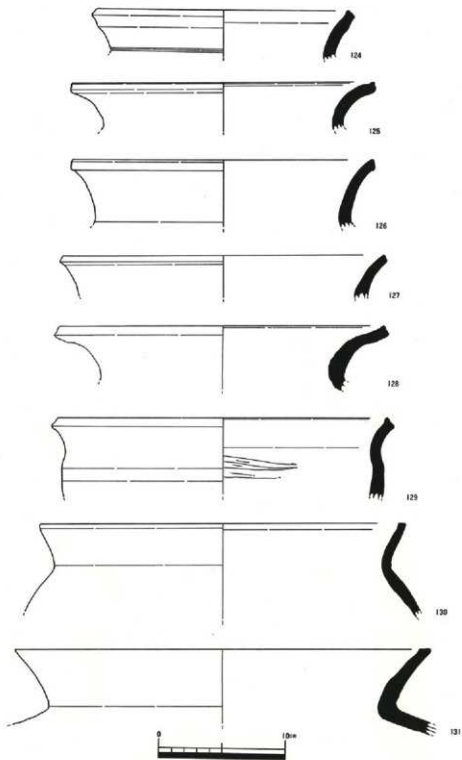


图30 包含层出土须惠器实测图4

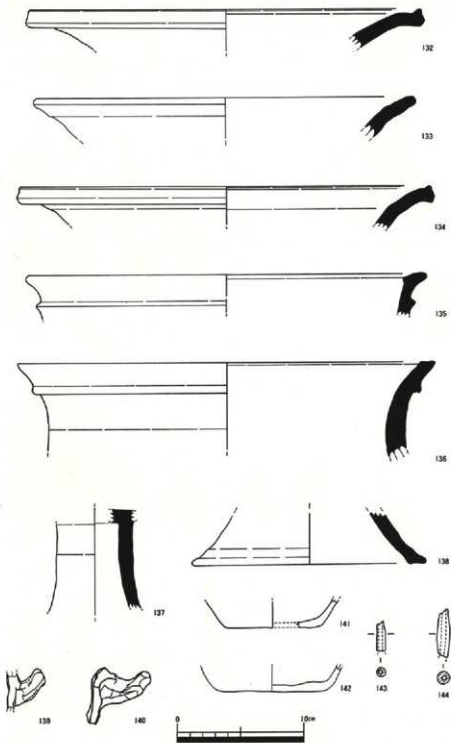


图31 包含层出土须惠器·土师器实例图5

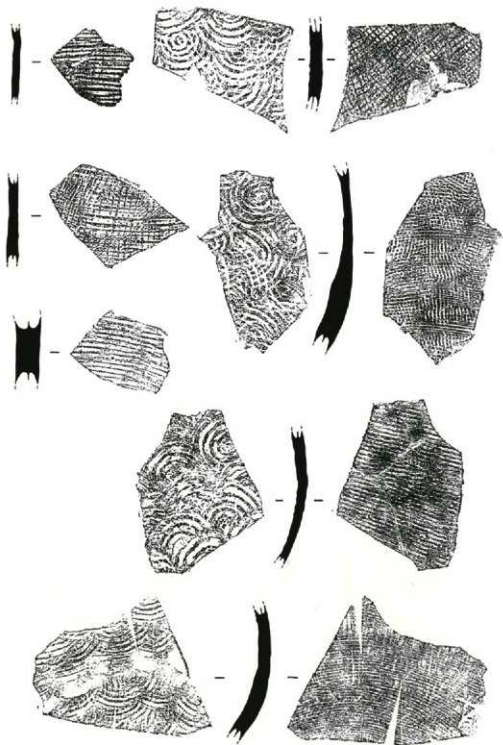


图32 須惠器裝拓影

120・121は全体の形状不明であるが、鉢形になるとみられる。120はゆるやかに内湾する口縁部の端部を丸く収め、外面の体部と口縁部との境付近に弱い段が付く。口縁部内外面は回転ナデが施されるが、体部外面には縦横のハケ目が文様風に施される。121は口縁部を肥厚させて、内面に弱い段が付く。また、外面の体部と口縁部の境付近にも突帯状に張り出した段が付く。鉢以外の可能性も残る個体である。

122～136は甕である。いずれも口縁部の破片で、細片のものが多く、口縁部が大きく外反する形態のものが大半であるが、なかには129のように「S」字形にゆるやかに屈曲しながら立ち上がるタイプのものもある。口縁部上面が湾曲するものが大半を占めるが、124・127・130のようにほぼ平坦面となるものもある。調整はいずれもクロコ回転を利用したナデで仕上げられる。体部の残るものは少ないが、129・130には外面に叩き目、131にはカキ目が施される。130・131には内面に青海波文が残る。なお、甕の体部破片のなかで、叩き目等の認められるものについて拓本を示した(図32)が、これによると平行条線状のもの、格子目状のものなどがある。また、内面は青海波文を残すものが多いが、一部これをナデ消すものもある。

137・138は高杯の脚部の破片である。138は脚底径18.5cmに復原され、脚端部を拡張して、端面を凹面に仕上げる個体である。

139・140はともに把手部のみの破片で、手びねりで成形し、甕などの器壁に貼付たものとみられる。

141・142は土師器の杯である。ともに底部をへうで切り離したとみられるが、142の底部外面には丁寧なナデが施される。

143・144は小形の管状土鍾である。当遺跡では土鍾の出土はこの2点のみである。

図33に示したのは用途・名称不明の須恵質の製品である。調査区東端から出土した。形態は分銅または土鈴に近い形状で、擴み部には穴が穿たれる。表面にはやや不揃いの面取りがへう状工具を用いて2段にわたって施される。底部はやや丸みを持つ。法量は高さが3.3cm、横幅が3.1cm、重さ30.4gを測る。

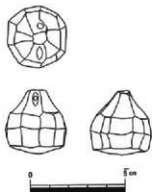


図33 異形須恵実測図

第5節 中世の遺構と遺物

(1) 概要

鎌倉時代とみられる遺物包含層は調査区全体には認められず、比較的良好な状態で残っていたのはイ区のみである。このイ区では水田造成時の盛土を除去すると灰色を呈する砂質土層が認められる。須恵器を含む層に類似する層であるが、さらに砂質の強い層である。この包含層は厚い部分では数十cmに達しており、多量の鉄滓と轆の羽口の断片が出土したほか、少量ではあるが備前焼のすり鉢・輸入陶磁器等の中世遺物が出土した。この地点では包含層の下層は砂礫層となるが、この砂礫層に掘り込まれた小土坑が1基検出された。

このイ区の南側にあたるア区では中世の良好な包含層は削平のためかほとんど認められなかったが、この地区では中世の遺物を含む溝1が検出された。

(2) 遺構と出土遺物

①溝1 (図34～36、表7、図版4)

調査区の西南部に位置し、西端は幅2.8m・深さ0.8～1m、南端は幅1.9m・深さ0.8～1mである。溝の堆積土層は砂質土を主体とするが、底の一部には粘性の強い層がみられた。出土遺物から鎌倉時代後半頃のものと推定される。

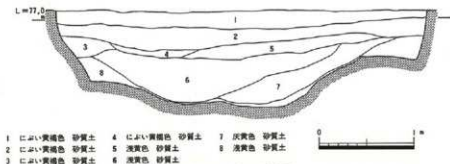


図34 溝1土層図

出土した遺物は須恵器・土師器・中国製の青磁・魚住の鉢・土師質の羽釜・鉄滓・轆の羽口などのほか、石器も少量出土している。

(土器)

145～156は須恵器であるが、溝自体の年代に伴うものでなく、周辺からの混入品である。145・146は杯臺で天井部外面中央部に摘みが付く。145は宝珠形の安定した摘みであるが、146は扁平な形状である。147～153は杯身である。底部を欠く148以外はいずれも低い高台が付くタイプである。体部から口縁部にかけての形態が分かるものは少ないが、147はやや内湾気味の体部がわずかに外反する口縁部に続き、口縁端部を尖り気味に収める。148はやや

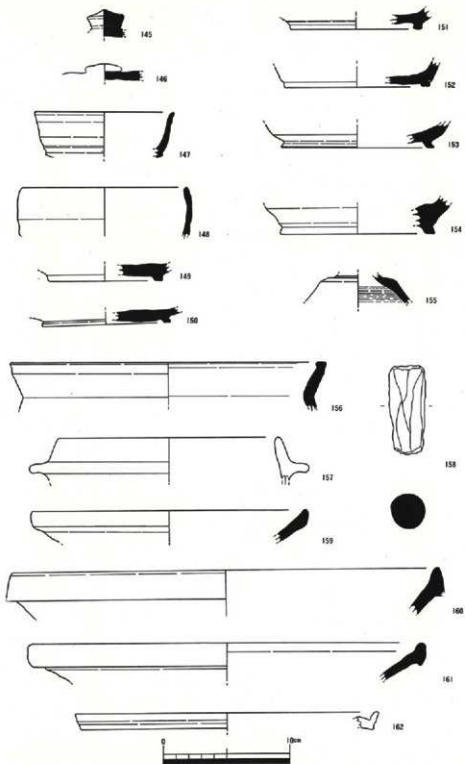


图35 溝1出土遺物(土器)実測図

内湾する体部と口縁部である。

154・155は蓋とみられる。154は底部の小片で、断面方形の安定した高台が付き、全体に器肉が厚い。155は小形のもので、肩部が水平に張り出す。

156は口縁部が「く」の字状を呈する甕の破片で、口恵24.8cmに復原される。口縁端部はわずかに拡張し、平坦面となる。

157は土師質の羽釜である。わずかに内湾する口縁部に断面方形の罫が水平方向に付く。口縁部内外面・罫部にヨコナデを施す。

158は須恵質の脚部の断片である。断面はほぼ円形を呈する。

159～161は魚住焼とみられるこね鉢の口縁部破片である。160・161は口縁端部を上下に大きく拡張する。159・161の口縁部外面は重ね焼により黒色となる。

162は弥生式土器ないしは土師器とみられる壺の口縁部の破片である。口縁端部は上方に大きく摘み上げる。複合口縁となるか。

(石器)

81・82は石鎌である。ともに平基式で、左右非対象である。82は先端部を欠失する。83・84は用途不明のものであるが、ともにサヌカイト製である。 (乾、一部福家加筆)

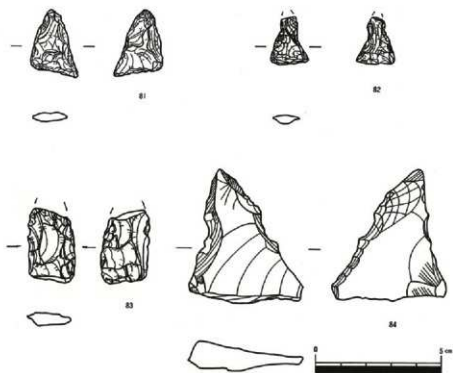


図36 溝1出土遺物(石器)実測図

②土坑4 (図37、図版4)

調査区中央部のイ区北寄りの地点で検出された土坑で、平面形は不整形である。直径約0.6m・深さ約0.4mである。埋土には焦土・炭化物が多く含まれる。埋土からは多量の鉄滓とともに櫛の羽口片も数点出土していることから、製鉄ないしは鍛冶に伴う遺構とみられる。

この土坑は厚い中世の包含層を除去した面で検出したこと、包含層と同様に多量の鉄滓が出土したこと、さらには底部回転糸切りの土師質小皿の小片が出土したことなどから中世の所産とみて誤りないと考えられる。

図示可能な出土遺物はない。

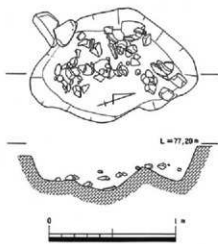


図37 土坑4 実測図

(3) 包含層出土遺物 (図38、表8、図版10)

163は土師質の杯である。底部に回転糸切り痕を明瞭に留める。体部上位でわずかに屈曲する。口縁端部はやや丸く収める。色調は赤褐色で、胎土には砂粒が少量含まれる。

164～167は土師質の小皿である。164は他に比べてやや量角が大きいタイプで、口径9.1

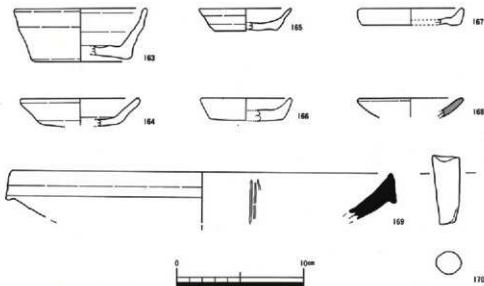


図38 包含層出土中世遺物実測図

cm・残存高2.2cm・底径6.0cmを測る。165はは体部・口縁部直線的で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部は回転糸切りで切り難される。166は短い体部・口縁部が付き、底部は回転糸切りで切り難される。167もほぼ同様である。この3点の法量は口径7.0~8.1cm・器高1.3~1.8cm・底径4.9~7.5cmの間に分布する。

168は瓦器の小皿である。小片であるが、口径8.1cmに復原される。

169は備前産のすり鉢である。口縁端部を上下に拡張し、下端部はわずかに垂下する。

170は土師質の脚部である。時期は不明であるが、中世の遺物とみられる。



写真7 羽 口



写真8 鉄 滓

第5章 遺構と遺物の検討

第1節 遺構について

(1) 各遺構の検討

①土坑1・2

この2基の土坑は弥生中期の遺構面をさらに掘り下げた面で検出されたもので、弥生中期の遺構埋土が全体に黒色を帯びる土層であるのに対し、地山に近い褐色系の土層であったことや縄文式土器と認定できる土器片と色調・胎土が類似する土器の細片が出土したことから、縄文時代の遺構である可能性が高い。しかし、その性格については、土坑2がその規模・形態からみて、土壇墓と考えられるものの、遺物がほとんど出土しなかったため明らかではない。

②土坑3

この土坑はすでに説明を加えたように、内部に集石がみられる点に特徴がある。この集石の性格については不明であるが、基底部の列石側面に火を受けた形跡が明瞭であることや、土坑底面に炭化物・焦土が認められたことから石を置いた状態で火がたかれたことはほぼ確実とみられる。ただし、火がたかれた理由は不明である。

このような内部に多数の石を置いた集石土坑ともいうべき土坑は、比較的近い位置関係にあり、ほぼ時期的にも一致する遺跡である北原遺跡の調査においても検出されている。特に、西地区で検出された土坑1は形態・規模・集石の状況等が極めて良く似ている。ただ、出土遺物は当遺跡の場合、石包丁などの石器が豊富な割には完形となる土器が出土していないのに対し、北原遺跡の場合はほぼ完形に復原可能なものが広口壺形土器2個体・大型鉢形土器1個体の計3個体出土している。こうした出土遺物が示す組成上の差異については検討の余地があるとしても、両者がほぼ同一の性格を有する遺構であると考えても誤りがないと思われる。なお、北原遺跡ではこうした集石を持つ土坑は土坑1以外にも認められ、当地域特有の遺構とも考えられる。

③掘立柱建物跡

この建物は周辺の包含層や遺物出土状況から考えて、単なる住居とはみられず、直ぐ北側に位置すると推定される須恵器焼成窯に伴う工房としての利用が想定される。ただ、直接窯に伴う用具などが出土していないために、断定し難い点もある。

ところで、窯の存在についてはすでに前章でも触れたが、この建物周辺の包含層からは窯壁の破片も出土しており、その存在は確実とみられる。出土遺物からみて、この窯で焼いた

ものは須恵器のなかでも、杯・壺・甕であったと考えられる。そのなかでも中心的な器形は退化した摘みが付く杯蓋と低い高台が付く杯身である。時期は後に述べるように出土遺物等から平安時代初期頃とみられる。

④溝 1

この溝は調査区の西端部で、一部が検出されただけのもので、正確な規模等は不明である。この溝の底の状況はわずかに砂層・粘土層が堆積していた程度で、常時水が流れた痕跡を示すものとはいえず、本来空濠として掘られた可能性も残る。空濠といえば館などの建物に伴うものが一般的であるが、当遺跡の場合はその存在については不明である。

⑤土坑 4

この土坑は砂層層に掘り込まれたもので、掘り方は肩の崩壊によってやや不明確であったが、内部からは埋土が鉄錆で赤く変色するほど鉄滓が多く出土した。このような状況から製鉄ないしは鍛冶に関連する遺構であると考えられる。時期的には土師質の小皿などからみて、鎌倉時代後半頃とみられる。

(2) 遺構の変遷

当遺跡で検出された遺構は大きく4期に分けることができる。I期は縄文時代後期ないしは晩期頃と推定される時期で、土坑1・2がこの時期に属すると考えられる。II期は弥生時代中期の終末期頃とみられる時期で、土坑3がこの時期の遺構である。III期は建物跡が属する時期で、後に検討する遺物から、平安時代の初期頃とみられる。IV期は大きくは中世の時期であるが遺物から鎌倉時代後半頃とみられる。溝1・土坑4が属する時期である。

各時期に属する遺構は群として把握されるものでなく、大半が単独での検出であるため、遺構相互間の関係は特に問題とすることはできないが、時期的な変遷に注目すると、弥生時代以前においては、明確な生活痕跡は認められず、集落の縁辺部にあたと考えられる。弥生後期から奈良時代までの間の時期は遺構はもちろん、遺物の出土もみられなかったが、平安時代初期には当地で須恵器が生産されるようになる。窯本体は調査区外に位置しているが、その窯に伴う工房の一部が検出されたことがそのことを示している。しかし、出土遺物でみる限りではその期間はさほど長期間ではなかったようである。窯が何らかの理由で廃絶した後、しばらくの空白期を置いて当地は再び製鉄などの工房が営まれたものと考えられる。製鉄に関しては現時点では直接的な遺構は検出できていないが、今回の出土遺物からみて、将来、調査が進めば当遺跡が製鉄遺跡として改めて注目される可能性が高い。

第2節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は整理用コンテナで約60箱である。種類としては須恵器が大半を占め、中世の鉄滓・羽口がそれに次ぐ。そのほかに弥生式土器、石器、縄文式土器、中世の土器などがあるがその量は少ない。以下、主要なものについて検討を加え、当遺跡の年代を決定する手掛かりとしたい。

表1 出土遺物一覧表

区分	旧石器時代・縄文時代の遺物		弥生時代の遺物							平安時代の遺物							中世の遺物				計					
	石器	土器	土器		石器					須恵器							土師土器		国内産器							
			土器	石器	土器	石器	土器	石器	土器	石器	土器	石器	土器	石器	土器	石器	土器	石器								
単出土遺物	0	0	0	2	3	6	6	8	5	15	21	3	3	3	8	2	2	0	0	0	1	9	0	3	0	83
包含層出土遺物	1	1	1	0	1	3	61	3	1	28	30	9	13	0	2	5	2	2	1	4	0	1	1	0	1	173
計	1	1	1	2	4	9	67	11	8	43	51	12	16	3	2	7	4	2	1	4	1	1	1	3	1	256

(数字は図示した遺物の点数を示す。)

(1) 弥生時代の遺物

(A) 土器

図示した弥生式土器は計15点である。このうち遺構に伴うものは11点である。器形としては壺形土器2点・甕形土器4点があり、ほかは底部のみの破片で器形不明である。

壺形土器

出土した2個体とも口縁部の破片であり、体部・底部の形状は詳らかでない。口縁部の形態はともに大きく外反するもので、いわゆる広口壺の口縁である。いずれも口縁端部を拡張し、弱い2条の凹線を施す。このような口縁を持つ壺形土器は北原遺跡でも出土しており、同遺跡の分類では壺形土器A b 2に分類される。このタイプの土器を含む一群の土器は調査者によっては弥生中期の終末段階のものと報告されるもので、この見解に従えば当遺跡出土の壺形土器も弥生中期の終末段階と考えることができる。

甕形土器

甕形土器はいずれも口縁部が「く」の字状に外反するタイプのもので、5・7は口縁端部を上下に拡張し、2条の弱い凹線を施す。ともに体部外面にはハケ目が施される。このタイプのものも北原遺跡から出土しており、同分類の甕形土器Cに該当する資料とみられる。6・16は口縁端部の断面形が方形を呈するもので、端部には凹線は施されない。ともに同分類の甕形土器Aに該当する資料とみられるが、16はやや不確定である。

これらの甕形土器の年代も北原遺跡出土例から弥生中期終末段階と考えられる。

(B) 石器

図示した弥生時代の石器の総点数は84点である。形態としては石鏃・石包丁・石錐などがある。

石鏃

石鏃は石器のなかでは最も数が多く、計67点を図示した。いずれもサヌカイトを石材とする打製のものである。形態についてみると、茎の有無によって大きく分けると有茎のものが14点、無茎のものが53点ある。有茎のものの中には柳葉形を呈するものがごく少量認められるほかはいずれも凸基式のものである。無茎のものは平基式のものと同基式のものがある。それぞれの点数は37点と16点であり、平基式のもの2倍以上を占めている。

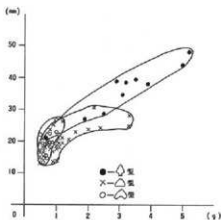


図39 石鏃法量分布図

宧形のものがないために長さ・重さの比較はやや難点があるが、おおよその傾向を把握するために8割以上遺存するものを選んで、比較を行ったのが図39である。これによると有茎のもの長さ・重さが比較的大きいことが確認され、強力な殺傷力を要求される武器・大形状の特製等にあたっては、これらの有茎の石鏃が使用されたものと考えられる。

石包丁

石包丁は遺構出土のもの8点、包含層出土のもの3点の計11点を図示した。いずれも打製のものである。このうち石材別にみると、結晶片岩製のものが10点で、サヌカイト製のものはただ1点のみである。

結晶片岩製のものはいずれも長方形の石材の左右両縁に抉り調整を施し、上下両縁ないしは一方の縁のみに調整を加えて刃部とするが、いずれも調整はやや粗雑である。

一方、サヌカイト製のものは左右両縁に抉り調整、上下両縁に丁寧な調整を施して刃部とする。

このような結晶片岩製の石包丁は、北原遺跡においてもほぼ同様のものが出土しているほか、吉野川下流域北岸の光勝院寺内遺跡、同南岸の庄遺跡でも出土している。さらに近年の調査によって、吉野川上流域の三加茂町稻持遺跡ではこうした形態の石包丁が生産されていたことが指摘されている。

(2) 平安時代の遺物

この時期と見られる遺物としては土師器と須恵器があるが、須恵器が圧倒的に多い。

(土師器)

まず、土師器についてみると、器形としては杯が出土しているのみである。杯は柱穴内から出土したものの2点と包含層から出土したものの2点の計4点である。包含層出土のものは底部から体部にかけての破片で、全体の形状は不明であるが、いずれも底部はヘラ切りによって切り離されたものとみられる。柱穴出土のものはそれぞれ形態が異なるものである。17はごく通例の形態であるが、18は器高値が大きく、碗形に近い形態である。いずれも底部はヘラ切りによって切り離されたと考えられるが、18は底部外面が丁寧にナデられ、切り離しの痕跡を留めない。

こうした徳島県内出土の土師器の編年的試みはまだ行われておらず、単独では年代決定の資料とはなりえないが、17の形態・手法上の特徴は、庄遺跡徳大蔵本団地地区体育館地点の水路状遺構の下層から出土した多量の土師器杯とほぼ共通するものである。この遺構は10世紀代のものと考えられることから、当遺跡出土の杯もほぼ同時期の年代観が想定される。18は類例の少ないものであるが、17と同時期のものと考えて差支えないであろう。

(須恵器)

次に須恵器であるが、器形としては杯蓋・杯身・壺・甕・皿・鉢などがある。このうち量的に多いのは杯蓋と杯身である。

杯蓋

当遺跡出土の杯蓋は天井部の中央部が残るものはすべて握みが付くタイプであり、握みを消失したとみられる個体はない。握みは扁平な形状のものが圧倒的に多いが、宝珠形のもの(145)や乳頭形のもの(60)も各1点認められる。天井部は大半のものが平坦であるが、ごく少数笠形に膨らみを持つもの(30など)もみられる。口縁部は天井部からゆるやかに下方に続き、口縁端部を下方に少し屈曲し、尖り気味ないしは丸く仕上げるものが中心である。

なお、以上のような形態と区別されるものに66・67がある。ともに天井部と口縁部の境を直角ないしは直角に近く屈曲させるもので、天井部までの高さが高い。このタイプのものは短頸壺の蓋の可能性が高いとみられるが、全形が判明しないのでここでは一応杯蓋に含めた。66は口縁端部の形状は不明であるが、67はわずかに外方に握み出す。

杯身

杯身は高台が付くものがほとんどである。高台が付かない杯身と考えて図示したのも少量あるが、このタイプについては全体の形状が明らかになるものがないため、厳密には杯身であるかどうかは確実とはいえない。

高台が付く杯身の高台はいずれも断面方形ないしは方形に近い形状のものであり、やや外

方に踏ん張る形態のものもあるが、いずれも高台高は低い。体部から口縁部にかけての形状が明らかになる個体は少ないが、一般的にいえば、体部から口縁部にかけては外傾しながら斜め上方にほぼ直線的に立ち上がるものが大半を占めるとみられる。分量については細片による復原値であるため正確さを欠くが、口径は10.9~18.3cm、器高は3.2~4.6cm、高台径は7.2~11.6cmの間に分布する。

以上のような偏平な摘みを有する杯蓋と断面方形の低い高台を持つ杯身はその出土量から考えてセット関係として把握されるものであろう。その所属時期は摘みの形態や口縁端部の形状、さらには摘みを消失したものがみられないことから、9世紀末から10世紀にかけてのものと考えられる。

壺

壺は遺構出土のもの3点、包含層出土のもの9点の計12点を図示した。いずれも破片で全体の形状が明らかになるものはない。このうち114・155の2点是小形壺である。また、115・116は口縁部のみの破片で、頸部が筒状を呈する形態の壺で、口縁端部を上方に摘み上げるタイプである。117も口縁部の破片であり、「く」の字状に屈曲する。口縁端部の断面形は方形を呈するタイプである。その他のものは底部のみ、または底部から体部下半部にかけての破片である。いずれも全体に器肉が厚く、低いが安定した高台を有するものである。体部の形状は不明なものが多いが、118はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、113・119は底部との境界付近で屈曲し、ほぼ直線状に立ち上がる形態である。

以上の壺も杯と同じ時期と考えられる。

甕

甕は遺構出土のもの3点・包含層出土のもの15点の計18点図示したが、いずれも破片で、全体の形状が明らかになる個体はない。

口縁部の形態等によって分類すると、大きくA・B・Cに分かれる。

甕Aは口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプのものである。この甕Aには口縁端部の断面形によってさらにⅠとⅡに細分される。甕AⅠは端部の断面形が方形ないしは方形に近い形状を呈するものである。このタイプのものには口縁部の上面が平坦面となるもの(48・49・124・130・131・156)と、口縁部が大きく外反するために湾曲するもの(125~128・134)がある。体部の形態・調整については明らかになるものが極めて少ないが、内面に青海波文の叩きの痕跡を留めるもの(49・130)とその痕跡をナデ消すもの(131)がある。

甕AⅡは口縁端部を拡張し、断面形が撥形を呈するタイプのものであり、122・123・132・133がこのタイプに属する。このタイプのものはいずれも口縁部が大きく外反し、口縁部の上面が湾曲する。体部の形態・調整が明らかになるものはない。

甕Bは口縁部の外面に突帯状の段を巡らせるものであり、135・136がこれに属する。

甕Cは口縁部がゆるやかな「S」字形に屈曲するタイプのもので、128がこれに属する。128の体部内面にはヘラケズリが施される。

以上のように分けた場合、最も比率が高いのは甕Aのタイプであり、甕Aのなかでも甕AⅠが最も多数を占めることが知られる。

ところで、以上のような口縁部等の形態差が時期差を反映するものか、または単なる個体差として把握されるかであるが、良好な一括資料に基づく分類でないために、いずれとも判断し難い面もあるが、共存する杯蓋や杯身に時期差を想定するだけの形態手法上の変化を見出し難いことから考えて、甕に認められる形態上の差異は同時期内の個体差として考えるのが妥当と思われる。従って、以上の甕も杯蓋・杯身などと同じ9～10世紀頃の年代のものと考えられる。

(3) 中世の遺物

中世の遺物は、すでに述べたように、図化していない鉄滓・羽口は比較的多いが、図示可能であった遺物は少ない。本書では土師質の杯・皿、備前焼のすり鉢、魚住焼のこね鉢などを図示したのみである。

土師質土器

杯と皿がある。杯は底部回転糸切りの痕跡を明瞭に留めるものが1点だけ包含層から出土した。この杯の形態・手法は徳島市中島田遺跡出土の杯AⅠに共通するものである。胎土・^(註7)焼成がやや異なるものの、時期的にも両者はほぼ同時期のものと考えて大きな誤りはないものと思われる。

皿は計4点(164～167)あるが、いずれも底部は回転糸切りで切り離される。このうち、166・167は杯と同様に中島田遺跡出土の皿Aに分類されるものと形態・手法がほぼ同じとみられる。165はやや法量が大きいタイプ、165は小皿であるが、口縁部が薄く、他の皿とはややタイプが異なる。

以上の杯・皿は中島田遺跡出土例との比較から、おおよそ鎌倉時代後半頃の年代が与えられる。

国内産陶器

備前焼のすり鉢と魚住焼のこね鉢がある。

すり鉢は包含層出土のもの1点(169)だけである。口縁端部の形状から備前焼繩年のIV^(註8)期に属する資料とみられる。

こね鉢は溝1から口縁部の細片が3点出土したのみである。このうち、口径の小さい159は口縁端部をあまり拡張しないが、他の160・161は大きく上下に拡張する。いずれも魚住焼とみられるが、端部の拡張の著しい160・161は赤根川支群の製品と考えられるもので、時期^(註9)

は13世紀後半から14世紀前半頃のものと思われる。

註記

註1) 徳島県教育委員会『北原遺跡』1988年。

註2) 註1参照。

註3) 徳島県教育委員会『光勝院寺内遺跡』1984年。

註4) 徳島県教育委員会『庄遺跡徳島大学蔵本団地地区医療短大地点現地説明会資料』1988年。

註5) 調査を担当した文化課の菅原康夫・湯浅利彦両氏のご教示による。1988年。

註6) 徳島県教育委員会『庄遺跡徳島大学蔵本団地地区体育館地点現地説明会資料』1982年。

註7) 徳島県教育委員会『中島田遺跡・南島田遺跡』1989年。

註8) 岡山県文化財保護協会『百間川原尾島遺跡2』1984年。

註9) 兵庫県教育委員会『魚住古窯跡群』1983年。

第6章 まとめ

当遺跡では、旧石器時代の遺物から中世にいたるまでの時代幅の広い遺構・遺物が検出されたが、特に注目されるのは、調査区内では検出できなかったものの、すぐ近辺に平安時代に須恵器を焼成した窯が存在するとみられたことや、鎌倉時代頃にすぐ近くで製鉄が営まれたことを示す遺物が出土したことである。以下、この2点についての知見を整理して、本書の締め括りとしてたい。

第1節 須恵器焼成窯について

今回の調査にあたっては、須恵器の窯跡が所在することが分布調査の結果から予測されていたが、結果的には窯跡を検出することはできなかった。しかし、出土した資料のなかに窯跡に特有な遺物である焼成不良品が多数認められること、窯壁片も多数出土していることから、この調査区の付近で窯が営まれたことはほぼ確実である。特に、調査区の東端部では包含層が炭化物・灰のために黒色を呈しており、すぐ近くに灰原が広がっている状況を示している。したがって窯はその箇所北側一帯に築かれたものと考えられるが、その地点は丁度溜池となっている部分にあたり、溜池築造時に破壊された可能性もある。

この窯で焼かれた器形は杯・甕が中心のようであるが、壺・鉢・皿なども少量認められる。杯には退化傾向の顕著な扁平な摘みを持つ蓋と断面方形状で低い高台をもつ杯身がある。甕は形態を復原し得る資料に恵まれないが、「く」の字状の口縁部を持ち、口縁端部の断面形を方形ないしは撥形に仕上げるものが多く焼かれている。窯の操業期間は良好な資料に恵まれないことから、厳密に特定することは困難であるが、9世紀末～10世紀初めの一時期であったと考えられる。甕の体部破片に少量ながら中世的要素と見られる格子目の叩きを施したのも認められることから、その期間には幅がある可能性も残るが、中心的な遺物である杯の形態は特に顕著な時期差はなく、比較的操業期間は限られていたと考えられる。

なお、当遺跡は山麓部の南向き斜面に位置しており、窯を構築するには地形的な条件も良く、周辺には窯業生産にとって欠かせない水・燃料も豊富に確保できる山や谷があることから、今後周辺の調査が進めば、さらに窯跡の所在が確認されるものと考えられる。

第2節 製鉄について

今回の調査で出土した大量の鉄滓と羽口片は鎌倉時代頃の土器に伴うもので、鎌倉時代に

当地で製鉄を行っていたことを窺わせる資料として注目される。

鍛冶でなく製鉄と判断するのは、鉄滓の量に比較して、鉄製品の未製品が全く出土しないこと、単なる野鍛冶では使用しないと思われる大形の鑪の羽口（基部で直径10cmを超えるものとみられる）が出土していることなどからである。今回の出土資料のみでは遑断できないとしても、今後、近辺（北側の斜面の可能性が高い）で製鉄炉等の製鉄関連遺構が検出される公算が大きい。

これまで、徳島県内では直接製鉄に関係する遺構・遺物は未発見であり、その実態は不明であるが、当遺跡と同じ土成町字高尾で北岸農業用水事業に伴って調査が行われた法教田遺跡^(注1)では、多数の鉄滓が出土し、近辺で製鉄が行われていた可能性が推定された。この法教田遺跡の場合も、平安時代頃の須恵器を焼いたとみられる窯の存在が想定されており、窯業から製鉄への変遷という過程では、当遺跡と同じである。こうした製鉄関連遺跡が土成町内で2箇所発見されたことは、当地が製鉄の原料となる砂鉄を産出したことを当然予測しなければならぬが、現段階ではこの点については未解明であり、今後の課題とせざるを得ない。

註記

注1) 第1章註7参照。

注2) 昭和58年度に実施した吉野川北岸農業用水事業に伴う精密分布調査で、多量の須恵器片が採集されたほか、炭化物・灰を多量に含む包含層が認められ、須恵器を焼成した窯が北側の斜面（現在は削平されている）に存在したことはほぼ確実と考えられる。

表2 土坑9出土弥生式土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3	弥生式土器 壺形土器	口径 11.8	頸部直立。口縁部大きく外反。口縁部上下に拡張し、2条の弱い凹縁を施す。	口縁部大きく外反。口縁部上下に拡張し、2条の弱い凹縁を施す。	器面摩耗につき調整不明。	灰褐色	最大5mmの砂粒を含む。	良好	
4	弥生式土器 壺形土器	口径 (15.0)	頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反。口縁部上下に拡張し、2条の弱い凹縁を施す。	口縁部から口縁部にかけてゆるやかに外反。口縁部上下に拡張し、2条の弱い凹縁を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面斜め方向のハケ目。内面横方向の粗いハケ目。	赤褐色、外面黒色	最大3mmの砂粒を含む。	やや不良	
5	弥生式土器 壺形土器	口径 15.0	口縁部「く」の字状に外反し、口縁部は上下に拡張する。口縁部部に弱い2条の凹縁を施す。体部ゆるやかに内湾。	口縁部「く」の字状に外反し、口縁部は上下に拡張する。口縁部部に弱い2条の凹縁を施す。体部ゆるやかに内湾。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上部斜め方向のハケ目。内面器壁割落につき調整不明。	赤褐色	最大3mmの砂粒を含む。	不良	
6	弥生式土器 壺形土器	口径 (21.2)	口縁部「く」の字状に外反し、口縁部はわずかに拡張。口縁部部はわずかに凹む。	口縁部「く」の字状に外反し、口縁部はわずかに拡張。口縁部部はわずかに凹む。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜め方向の粗いハケ目。内面器壁割落につき調整不明。	暗褐色	最大2mmの砂粒を含む。	不良	
7	弥生式土器 壺形土器	口径 (23.0)	口縁部「く」の字状に外反し、口縁部は大きく拡張。口縁部部に2条の弱い凹縁を施す。	口縁部「く」の字状に外反し、口縁部は大きく拡張。口縁部部に2条の弱い凹縁を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデか。	暗褐色	最大2mmの砂粒を含む。	不良	
8	弥生式土器 底部	底径 5.7	やや上げ底気味の平底。	やや上げ底気味の平底。	内外面ナデ。	赤褐色、一部黒色	最大4mmの砂粒を含む。	やや不良	
9	弥生式土器 底部	底径 (6.0)	やや上げ底気味の平底。	やや上げ底気味の平底。	摩耗により調整不明。	灰褐色、一部黒色	微砂粒を、少量含む。	やや不良	
10	弥生式土器 底部	底径 (7.9)	やや上げ底気味の平底。	やや上げ底気味の平底。	摩耗により調整不明。	灰褐色	砂粒を少量含む。	不良	

※ () 内は復原値である。

番号	器種	法量 (cm)	形態の特微	手法の特微	色調	胎土	焼成	備考
11	弥生式土器 底部	底径 (8.0)	平底。全体に器内薄い。	底部外面・体部外面丁字なナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面ナデ。	赤褐色。	赤砂粒を少量含む。	良好	
12	弥生式土器 底部	底径 (7.6)	平底。	内面調整不明。体部外面ヘラミガキ。底部外面ナデ。	灰褐色	砂粒を少量含む。	やや不良	

表3 包含層出土弥生式土器調査表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特微	手法の特微	色調	胎土	焼成	備考
13	弥生式土器 底部	底径 (6.8) 残存高 2.3	やや上げ底気味の平底で、底部中央部の器内薄い。	器壁剥落により調整不明。	赤褐色	赤砂粒を多く含む。	良好	
14	弥生式土器 底部	底径 7.7 残存高 3.8	底部平底で、器内薄い。	摩耗により調整不明。	褐色	最大3mmの砂粒を含む。	良好	
15	弥生式土器 底部	底径 (9.4) 残存高 5.0	体部下半部斜め上方に直線的に並び、底部平底。底部の器内は体部に比べ薄め。	体部外面斜め方向のヘラケズリ。部分的に載方向の細かいハケ目を施す。同内面・底部内面器壁剥落により調整不明。底部外面ナデ。	赤褐色、部分的に黒色。	最大3mmの砂粒を多く含む。	やや不良	
16	弥生式土器 彌影土器	口径 (10.7) 残存高 5.0	口径部「く」の字状に屈曲し、肩部を丸く仕上げる。全体的に器内薄い。	口径部内外面ヨココナデ。体部内面ヘラケズリ。同外 面ユビオリサエ後ナデ。	褐色	最大3mmの砂粒を含む。	良好	

表4 柱穴出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
17	土師器 杯	口径 11.5 器高 3.4 底径 7.8	体部・口縁部直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。	底部へラ切り。底部外面以外回転ナデ。	黄褐色、一部黒色	微砂粒を多く含む。	不良	
18	土師器 杯	口径 (11.9) 器高 5.2 底径 (7.7)	体部・口縁部直線的に急激に立ち上がる。口縁端部はやや尖る。全体的に器壁薄い。	底部へラ切り後ナデ。底部外面以外ナデ。	黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
19	須恵器 杯身	口径 (13.3) 器高 3.4 高台径 (7.5)	体部から口縁部にかけてほぼ直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味に仕上げる。高台断面方形で低い。	全体に回転ナデ。高台は削り出し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
20	須恵器 高杯 (脚部)	脚径 (14.3)	脚部大きく外方に開き、脚端部は平機に仕上げる。やや器形に歪が認められる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面とも丁寧な回転ナデ調整を施す。	灰色	微砂粒をごく少量含む。	良好	

表5 土器だまり出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
21	須恵器 杯蓋	現存高 1.2 積み径 3.0 積み高 0.5	天井部外面中央に扁平な積みが付く。天井部は平坦で、わずかに中央部が凹む。	天井部内外面とも回転ナデ。	灰白色	砂粒を少量含む。	良好	
22	須恵器 杯蓋	現存高 2.4 積み径 2.8 積み高 0.8	天井部外面中央に扁平な積みが付く。天井部はやや丸みを持つ。	天井部内外面とも回転ナデ。	灰色	最大2mmの砂粒を含む。	良好	
23	須恵器 杯蓋	現存高 1.4 積み径 3.2 積み高 0.5	天井部外面中央に扁平な積みが付く。天井部は平坦。	天井部内外面とも回転ナデ。	灰色	最大2mmの砂粒を含む。	良好	

番号	器	種	法量 (cm)	形態の特 徴	手法の特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
24	須恵器	杯蓋	残存高 1.5 握み径 3.3 握み高 0.5	天井部外面中央に扁平な宝珠形の握みが付く。天井部は平坦。	摩耗により調整不明。	淡黄色	砂粒を少量含む。	不良	
25	須恵器	杯蓋	残存高 1.7 握み径 2.9 握み高 0.7	天井部外面中央に扁平な宝珠形の握みが付く。天井部は平坦。	摩耗により天井部外面調整不明。内面回転ナデ。	黄灰色	砂粒を少量含む。	不良	
26	須恵器	杯蓋	残存高 1.7 握み径 3.3 握み高 0.8	天井部外面中央に扁平な宝珠形の握みが付く。天井部の中央部凹む。	天井部内外面・握みとも回転ナデ。	明青灰色	最大 3mm の砂粒を含む。	良好	
27	須恵器	杯蓋	残存高 2.3 握み径 3.5 握み高 0.6	天井部外面中央になかくぼみの扁平な握みが付く。天井部は丸みを帯ず。	摩耗により調整不明。	灰白色	砂粒を少量含む。	不良	
28	須恵器	杯蓋	口径 (17.1) 器高 2.9 握み径 (3.5) 握み高 0.3	天井部は平坦で、口縁部にかけて内溝。口縁端部はわずかに内傾し、尖り気味に仕上げる。天井部外面に扁平な握みが付く。	全体に回転ナデ。	灰色	最大 3mm の砂粒を含む。	良好	
29	須恵器	杯蓋	口径 (12.2) 残存高 1.9	天井部丸みを持つ。口縁端部はわずかに下方に握み出し、丸く仕上げる。	全体に回転ナデ。	灰白色	最大 2mm の砂粒を含む。	不良	
30	須恵器	杯蓋	口径 (15.6) 残存高 3.5	天井部丸みを持つ。口縁端部はわずかに内傾し、丸く仕上げる。	全体に回転ナデ	青灰色	砂粒を少量含む。	良好	
31	須恵器	杯蓋	口径 (15.7) 残存高 2.2	口縁部の細片。口縁端部は下方にやや外反し、尖り気味に仕上げる。	全体的に回転ナデ。部分的に斜め方向のナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
32	須恵器	杯蓋	口径 (16.5) 残存高 1.1	口縁端部は丸く仕上げる。口縁部から天井部の外面凹凸顯著。器形重調審。	全体に強い回転ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
33	須恵器	杯蓋	口径 (22.7) 残存高 1.4	天井部・口縁部平坦で、口縁端部は下方に握み出し、丸く仕上げる。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器 種	法 量 (m)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調	土 質	焼 成	備 考
34	須恵器 杯身	口径 (13.8) 残存高 2.7	体部直線的で、口縁部わずかに外反。 口縁部は丸みを持つ。	全体的に回転ナズ。	青灰色	微砂粒を 少量含む。	良好	
35	須恵器 杯身	口径 (13.2) 残存高 3.0	体部から口縁部にかけてゆるやかに 屈曲し、口縁部をやや尖り気味に 仕上げる。	全体に回転ナズ。	青灰色	微砂粒を 少量含む。	良好	
36	須恵器 杯身	口径 (14.1) 残存高 2.1	体部・口縁部直線的に延びる。口縁 部はやや尖り気味に仕上げる。	全体に回転ナズ。	灰色	微砂粒を 少量含む。	良好	
37	須恵器 杯身	口径 (14.9) 残存高 3.1	体部・口縁部直線的に斜め上方に延 びる。口縁部はやや尖る。	全体に回転ナズ。	灰白色	砂粒を少 量含む。	不良	
38	須恵器 杯身	口径 (18.3) 残存高 2.8	体部直線的、口縁部やや内湾。口縁 部は尖り気味に仕上げる。	摩耗につき調整不明。	黄褐色	微砂粒を 少量含む。	不良	
39	須恵器 杯身	口径 (7.3) 残存高 1.6	体部は大きく外方に開くか。底部は 平底で、器肉厚い。	底部外面ナズ。その他は摩 耗により調整不明。	外面灰色 内面黄褐色	砂粒を多 く含む。	不良	
40	須恵器 杯身	口径 (7.2) 残存高 1.5	底部平底で、やや突出気味。体部は 大きく外方に開くか。	底部外面粗いナズ。その他は摩 耗により調整不明。	灰色	微砂粒を 少量含む。	やや不良	
41	須恵器 杯身	高台径 (10.4) 残存高 1.4	断面逆台形状の低い高台がわずかに 外方に縮ん張る。	高台部回転ナズ。その他は 摩耗により調整不明。	灰白色	砂粒を少 量含む。	不良	
42	須恵器 杯身	高台径 (11.4) 残存高 1.0	断面逆台形状の低い高台が付く。	底部外面粗いナズ。その他 は回転ナズ。	淡黄色	砂粒を多 く含む。	不良	
43	須恵器 杯身	高台径 (11.2) 残存高 1.0	臺付け部が押しつぶれた低い高台が 付く。	底部外面粗面を留める。そ の他は摩耗により調整不明。	黄灰色	砂粒を少 量含む。	不良	
44	須恵器 杯身	高台径 (11.6) 残存高 1.6	断面台形状の低い高台が付く。	底部外面中央粗面を留め る。その他は回転ナズ。	灰色	砂粒を少 量含む。	やや不良	

番号	器種	法量 (cm)	形態の特微	手法的特微	色調	胎土	焼成	備考
45	須惠器 杯身	高台径 (11.4) 残存高 2.5	断面方形でやや細身の高台が外方に陥入する。	全体に回転ナデ。高台貼り付けか。底部外面にへらによる波線状の刻線が施される。	灰白色	最大3mmの砂粒を含む。	やや不良	
46	須惠器 杯身	口径 (15.5) 器高 3.5 高台径 (10.1)	体部・口縁部斜め上方に直線的に延び、口縁端部を尖り気味に仕上げる。断面方形の低い高台がやや外方に陥入する。	全体に回転ナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	不良	
47	須惠器 甕	残存高 4.2	胴部ではほぼ直角に屈曲する。体部は直線的。	全体的に回転ナデ。胴部外面に弱い凹線を施す。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
48	須惠器 甕	口径 (28.0) 残存高 6.3	口縁部「く」の字状に外反し、胴部を平坦に仕上げる。	口縁部内外面回転ナデ。体部外面に叩き目を施す。	灰色	砂粒を少量含む。	不良	
49	須惠器 甕	口径 (24.5) 残存高 8.8	口縁部「く」の字状に外反する。胴部はわずかに拡張する。	口縁部内外面・体部外面摩耗により調整不明。体部内面に青海波文の叩きを施す。	淡黄褐色	砂粒を少量含む。	不良	

表0 包含層出土須惠器・土師器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特微	手法的特微	色調	胎土	焼成	備考
50	須惠器 杯蓋	残存高 1.4 横径 3.0 横径高 1.4	天井部外面中央部になかくぼみの属平な横径が付く。	横径は回転ナデにより仕上げられる。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
51	須惠器 杯蓋	残存高 1.2 横径 3.5 横径高 0.8	天井部外面中央部に扁平な横径が付く。	横径は回転ナデにより仕上げられる。	揃み灰色 天井部褐色	砂粒をごく少量含む。	不良	
52	須惠器 杯蓋	残存高 1.5 横径 2.2 横径高 0.7	天井部外面中央部に扁平な横径が付く。	横径は回転ナデにより仕上げられる。	青灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	

番号	器 種	法 量 (mm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	考 考
53	須臾器 杯蓋	残存高 1.2 横み径 2.2 横み高 1.0	天井部外面中央部に扁平な積みが付く。	摩擦により調整不明。	青灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
54	須臾器 杯蓋	残存高 1.6 横み径 2.5 横み高 0.6	天井部外面中央部に扁平な積みが付く。	摩擦により調整不明。	緑灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	自然軸がかか
55	須臾器 杯蓋	残存高 1.2 横み径 3.2 横み高 0.5	天井部外面中央部に扁平な宝珠形の積みが付く。天井部の中央部凹む。	天井部内外面・積みとも回転ナデ。	灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
56	須臾器 杯蓋	残存高 1.5 横み径 2.9 横み高 1.5	天井部外面中央部になかくぼみの扁平な積みが付く。	摩擦により調整不明。	灰色	砂粒を多く含む。	不良	
57	須臾器 杯蓋	残存高 1.4 横み径 3.0 横み高 0.8	天井部外面中央部に扁平な宝珠形の積みが付く。	摩擦により調整不明。	緑灰色	砂粒を少量含む。	良好	自然軸がかか
58	須臾器 杯蓋	残存高 1.7 横み径 2.5 横み高 0.8	天井部外面中央部に扁平な宝珠形の積みが付く。天井部は平坦。	摩擦により調整不明。	灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	自然軸がかか
59	須臾器 杯蓋	残存高 1.2 横み径 1.8 横み高 0.6	天井部外面中央部に乳歯形の積みが付く。天井部外面中央部やや凹む。	天井部内外面とも回転ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
60	須臾器 杯蓋	残存高 1.9 横み径 1.8 横み高 1.2	天井部外面中央部に球形に近いやや高めでの小さい積みが付く。天井部外面中央部わずかに凹む。	天井部内外面とも回転ナデ。	灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
61	須臾器 杯蓋	残存高 1.2 横み径 3.2 横み高 0.5	天井部外面中央部に扁平な積みが付く。天井部外面中央部わずかに凹む。	天井部内外面とも回転ナデ。	青灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
62	須恵器 杯蓋	残存高 1.5 柄高 3.2 柄み径 3.2 柄み高 0.6	天井部外面中央部に扁平な柄みが付く。柄みの中央部はやや突起状に膨らむ。天井部外面中央部わずかに凹む。	天井部内外面とも回転ナデ。	灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
63	須恵器 杯蓋	残存高 1.4 柄み径 3.0 柄み高 0.8	天井部外面中央に扁平な宝珠形の柄みが付く。天井部の中央部凹む。	天井部内外面・柄みとも回転ナデ。	明青灰色	最大 3mm の砂粒を含む。	良好	
64	須恵器 杯蓋	残存高 1.4 柄み径 3.2 柄み高 0.6	天井部外面中央部に扁平な柄みが付く。天井部平坦。天井部と口縁部の境に弱い稜が認められる。	天井部内外面とも回転ナデ。	灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
65	須恵器 杯蓋	口径 (9.4) 残存高 1.3	天井部は口縁部との境から急に立ち上がった後、平坦となる。口縁部には折れ曲がり、水平な平坦面となる。	天井部内外面とも回転ナデ。	緑灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	自然軸がかか る。
66	須恵器 杯蓋	残存高 2.6	天井部は口縁部との境からほぼ直角に折れ曲がり、水平な平坦面となる。	全体に回転ナデ。	灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
67	須恵器 杯蓋	口径 (13.1) 残存高 2.6	口縁部から天井部にかけて急に折れ曲がる。天井部はほぼ平坦。口縁部は平坦面となる。	全体に回転ナデ。	淡緑灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
68	須恵器 杯蓋	口径 (14.2) 残存高 2.5	口縁部から天井部にかけてなだらかに立ち上がる。口縁部は尖らせる。	全体に回転ナデ。	灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	自然軸がかか る。
69	須恵器 杯蓋	口径 (13.6) 残存高 1.5	口縁部はなだらかに立ち上がる。口縁部は屈曲し、先端部を尖らせる。	口縁部内外面とも回転ナデ。	淡灰色	砂粒を少量含む。	良好	
70	須恵器 杯蓋	口径 (15.9) 残存高 1.3	天井部柄み近により大きく凹む。口縁部は屈曲し、先端部はやや丸い。	全体に回転ナデ。	青灰色	砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量 (m)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
71	須恵器 杯蓋	口径 (10.0) 残存高 1.8	口縁部と天井部の境は段を形成。口縁部大きく屈曲し、先端部を尖らせる。天井部は中央部に向かって傾斜する。	全体に回転ナデ。口縁部の器内をヘラで削り取り、やや薄く仕上げる。	青灰色	砂粒を少量含む。	良好	
72	須恵器 杯蓋	口径 (10.1) 残存高 1.0	口縁部の細片。口縁端部屈曲し、先端部尖る。	口縁部全体回転ナデ。	青灰色	砂粒をごく少量含む。	良好	
73	須恵器 杯蓋	口径 (16.7) 残存高 0.8	口縁部平坦で、端部を屈曲させ、先端部を尖らせる。やや歪あり。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	一部自然傷がかかる。
74	須恵器 杯蓋	口径 (17.4) 残存高 2.0	口縁部から天井にかけてゆるやかに立ち上がる。口縁端部尖る。	口縁部全体回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
75	須恵器 杯蓋	口径 (19.2) 残存高 2.2	口縁部から天井部にかけてゆるやかに立ち上がる。口縁端部はわずかに屈曲する。	口縁部内外面とも回転ナデ。	青灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
76	須恵器 杯蓋	口径 (20.0) 残存高 1.1	口縁部の細片。口縁端部屈曲し、先端部やや尖る。	口縁部内外面とも回転ナデ。	淡灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
77	須恵器 杯蓋	口径 (20.0) 残存高 1.5	口縁からゆるやかに立ち上がる。口縁部はわずかに屈曲し、先端部は丸みを持つ。	口縁部内外面とも回転ナデ。	黄褐色	砂粒をごく少量含む。	不良	
78	須恵器 杯身	口径 (10.2) 器高 3.2 高台径 (7.2)	体部直線的に急激に立ち上がる。口縁部はやや外反意味。低い高台が付く。	全体に回転ナデ。高台は削り出し。	青灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
79	須恵器 杯身	口径 (13.7) 器高 4.6 高台径 (8.5)	体部下位で大きく屈曲した後、直線的に立ち上がる。口縁部も直線的で、端部はやや尖り意味。高台付き。	全体に回転ナデ。高台削り出し。	青灰色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
80	須臾器 杯身	口径 (14.4) 器高 4.3 高台径 (9.3)	体部やや内湾気味に斜め上方に立ち上がり、直線的に延びる口縁に続く。口縁端部はやや尖る。器壁の凹凸顯著。断面台形状の高台が付く。	全体に回転ナズ。高台貼り付け。	淡灰色	最大 2mm の砂粒を含む。	不良	
81	須臾器 杯身	口径 (13.6) 残存高 2.8	口縁部わずかに内湾。口縁端部は丸い。体部外面クロク目が顕著に残る。	全体に回転ナズ。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
82	須臾器 杯身	口径 (13.8) 残存高 3.5	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	全体に回転ナズ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
83	須臾器 杯身	口径 (14.6) 残存高 2.4	口縁部の細片。口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面回転ナズ。	淡灰色	微砂粒を少量含む。	不良	
84	須臾器 杯身	口径 (10.1) 残存高 2.5	口縁端部はやや内湾。口縁端部肥厚し、丸い。	口縁部内外面回転ナズ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
85	須臾器 杯身	口径 (10.9) 残存高 3.0	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。口縁部の器内やや湾め。	口縁部内外面回転ナズ。	青灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
86	須臾器 杯身	口径 (13.3) 残存高 2.3	口縁部の細片。口縁部ほぼ直線的。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面回転ナズ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
87	須臾器 杯身	口径 (14.6) 残存高 4.6	体部ほぼ直線的に急激に立ち上がり、口縁部に続く。口縁端部はやや尖る。	全体的に回転ナズ。	外面青灰色、内面灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
88	須臾器 杯身	口径 (14.9) 残存高 3.6	体部直線的に立ち上がり、やや外反気味の口縁部は丸い。	全体に回転ナズ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
89	須臾器 杯身	口径 (15.8) 残存高 3.7	体部やや内湾気味に立ち上がり、やや外反気味の口縁部に続く。口縁端部は尖り気味に仕上げる。	全体に回転ナズ。	灰白色	最大 2mm の砂粒を含む。	やや不良	
90	須臾器 杯身	口径 (16.2) 残存高 2.8	体部から口縁部にかけての細片。体部・口縁部とも直線的。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。	全体に回転ナズ。	褐色	微砂粒を少量含む。	不良	

番号	器種	法量(m)	形態の特微	手法の特微	色調	胎土	焼成	備考
91	須恵器 杯身	口径(17.8) 残存高 3.0	体部から口縁部にかけての細片。体部・口縁部とも直線的。口縁部はやや失り気味に仕上げる。	全体に回転ナズ。	黄褐色	霰砂粒を少量含む。	不良	
92	須恵器 杯身	底径(8.3) 残存高 1.6	底部から体部にかけての細片。底部は平底か。	底面回転ヘラ切り。底部外面以外回転ナズ。	灰色	霰砂粒を少量含む。	良好	
93	須恵器 杯身	底径(7.6) 残存高 2.6	底部平底。内面に顕著なクロロ目を留める。	底部外面回転ナズ。底部外面以外回転ナズ。	灰色	霰砂粒を少量含む。	やや不良	底面外面部分的に自然釉。
94	須恵器 杯身	高台径(7.4) 残存高 1.4	断面方形の低い高台が付く。	全体に回転ナズ。高台貼り付け。	青灰色	霰砂粒を少量含む。	良好	
95	須恵器 杯身	高台径(8.9) 残存高 1.6	体部下位で大きく屈曲。断面方形の低い高台が付く。	底部内面回転ナズ。その他は磨耗により調整不明。	灰白色	霰砂粒を少量含む。	不良	
96	須恵器 杯身	高台径(9.6) 残存高 1.8	底部から体部にかけての細片。体部下位で大きく屈曲。断面方形で細身の高台が付く。	全体に回転ナズ。高台削り出し。	赤灰色	精良	良好	
97	須恵器 杯身	高台径(10.6) 残存高 1.9	断面方形の高台が付く。	体部外面下部ヘラケズリ。その他は回転ナズ。	灰色	砂粒を少量含む。	やや不良	
98	須恵器 杯身	高台径(13.0) 残存高 1.5	体部下位で大きく屈曲後内高か。断面方形の高台が付く。底部中央部の器肉厚め。高台曇り部内積。	全体にヘラで削り整えた後、回転ナズ。高台削り出し。	灰色	最大2mmの砂粒を含む。	やや不良	
99	須恵器 杯身	高台径(14.8) 残存高 2.0	細片。断面方形の安定した高台が付く。	全体的に回転ナズ。高台削り出し。	淡青灰色	霰砂粒を少量含む。	良好	
100	須恵器 杯身	高台径(9.1) 残存高 1.9	断面逆台形状の低い高台が付く。全体に器肉厚い。	全体に回転ナズ。高台削り出し。	灰色	霰砂粒を少量含む。	良好	
101	須恵器 杯身	高台径(9.1) 残存高 2.0	断面逆台形状の低い高台が付く。	全体に回転ナズ。高台削り出し。	灰色	霰砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
102	須臾器 杯身	高台径(7.2) 残存高 2.6	体部下位で大きく屈曲し、直線的に延びる。断面近台形状の高台がやや外方に陥ん張る。	全体にへラで削り整えた後、回転ナデ。高台削り出し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好		
103	須臾器 杯身	高台径(8.0) 残存高 2.6	体部直線的。断面方形の低い高台が付く。	全体に回転ナデ。高台削り出し。	青灰色	微砂粒を多く含む。	良好		
104	須臾器 杯身	高台径(10.5) 残存高 2.1	幅広で、断面方形の低い高台が付く。高台量付け部内縁。	摩耗により調整不明。高台削り出し。	灰白色	微砂粒を少量含む。	不良		
105	須臾器 杯身	高台径(11.3) 残存高 1.6	断面方形の低い高台が外方に陥ん張る。	全体に回転ナデ。高台削り出し。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良		
106	須臾器 杯身	高台径(10.2) 残存高 1.9	体部下位で大きく屈曲。断面方形の低い高台が付く。	底部外面ナデか。底部外面以外回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良		
107	須臾器 杯身	高台径(10.9) 残存高 3.0	体部直線的に斜め上方に立ち上がる。断面方形の低い高台が付く。	全体に回転ナデ。	淡赤灰色	微砂粒を少量含む。	良好		
108	須臾器 皿	口径(14.1) 器高 1.9 底径(11.5)	体部・口径部直線的に斜め上方に延び、口径端部を尖らせる。	底部切り離し不明。全体に回転ナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	不良		
109	須臾器 皿	口径(13.4) 器高 1.7 底径(10.7)	体部・口径部わずかに外反しながら、斜め上方に延びる。口径端部は丸い。	底部切り離し不明。全体に回転ナデ。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好		
110	須臾器 盤	高台径(14.8) 残存高 1.1	断面方形の低い高台が付く。大形品。	断面方形の低い高台が付く。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好		
111	須臾器 蓋	高台径(14.8) 残存高 4.0	広口蓋の頸部破片。口径部に向けて大きく外反する。	全体に丁寧な回転ナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好		

番号	器 種	法 量 (m)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	納 成	備 考
112	須恵器 壺	高台径(9.6) 残存高 2.8	底部小片。断面台形状の高台が付く。全体に器肉厚い。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
113	須恵器 壺	高台径(10.3) 残存高 3.9	体部直線的に斜め上方に立ち上がる。断面方形の低い高台が付く。全体に器肉厚い。	底部外面ナデ。底部外面以外回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
114	須恵器 壺	口径(4.6) 器高 2.2	口縁部大きく外反し、肩部は平坦面となる。頸部短く、大きく張り出す肩部に続く。	全体に回転ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
115	須恵器 壺	口径(9.0) 器高 3.1	口縁部大きく外反し、肩部を積み上げて、先端部を鋭く尖らせる。	全体に回転ナデ。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
116	須恵器 壺	口径(9.9) 残存高 2.1	口縁部大きく外反し、肩部を積み上げて、先端部を鋭く尖らせる。	全体に回転ナデ。	褐灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
117	須恵器 壺	口径(10.7) 残存高 4.3	頸部から口縁部にかけて「く」の字体に大きく外反し、口縁肩部を平坦に仕上げる。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	頸部内面に自然釉がかかる。
118	須恵器 壺	高台径(7.2) 残存高 5.4	体部の器肉厚く、大きく内湾する。断面方形の低い高台が付く。高台臺付け部凹面となる。	全体に回転ナデ。高台削り出し。	外面褐灰色、内面灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
119	須恵器 壺	高台径(9.7) 残存高 4.6	体部内湾気味に立ち上がる。断面方形のやや高めの高台が外方に膨らむ。	全体に回転ナデ。高台削り出し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
120	須恵器 鉢	口径(30.0) 残存高 4.4	体部直線的で口縁部はわずかに内湾する。口縁肩部は尖り気味に仕上げられる。外面の体部と口縁部の境に段が付く。	口縁部内面回転ナデ。体部外目に家橋のハケ目を文様風に施す。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
121	須恵器 鉢	口径 (32.8) 残存高 3.0	口縁部の細片。口縁部やや内溜。口縁部内面に削いだ段が付き、端部を平坦に仕上げる。外面の体部・口縁部の境付近に芙蓉状の段が付く。	全体に回転ナデ。	青灰色	兼砂粒を少量含む。	やや不良	
122	須恵器 甕	口径 (19.2) 残存高 3.3	口縁部の細片。口縁下大きく外反。口縁端部は平坦に仕上げる。	全体に回転ナデ。	外面黒灰色、内面灰色	兼砂粒を少量含む。	良好	
123	須恵器 甕	口径 (22.8) 残存高 0.5	頸部「く」の字状に屈曲し、やや外反気味に急激に立ち上げる。口縁端部は平坦に仕上げる。	全体に回転ナデ。	灰色	兼砂粒を少量含む。	良好	
124	須恵器 甕	口径 (19.8) 残存高 3.6	口縁部外反し、端部付近でわずかに屈曲。端部は平坦となる。	全体に回転ナデ。	灰色	兼砂粒を少量含む。	良好	外面に自動輪がかかる
125	須恵器 甕	口径 (23.9) 残存高 2.0	口縁部外反し、端部は平坦。	全体に回転ナデ。口縁端部は特に強くナデる。	灰色	兼砂粒を少量含む。	良好	
126	須恵器 甕	口径 (23.8) 残存高 5.3	口縁部の細片。口縁部外反し、端部を尖り気味に仕上げる。	全体に回転ナデ。	灰色	兼砂粒を少量含む。	良好	
127	須恵器 甕	口径 (25.4) 残存高 3.2	口縁部の細片。口縁部外反。端部やや肥厚し、端部を平坦に仕上げる。	全体に回転ナデ。	灰色	兼砂粒を少量含む。	良好	
128	須恵器 甕	口径 (25.7) 残存高 5.0	口縁部大きく外反し、端部を平坦に仕上げる。	全体に回転ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
129	須恵器 甕	口径 (26.0) 残存高 6.2	口縁部わずかに外反。口縁端部わずかに拡張し、端部を凹面に仕上げる。	口縁部内外面回転ナデ。体部内面へラケズリ。凹外面細かい目の叩きを施す。	灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	
130	須恵器 甕	口径 (28.9) 残存高 7.6	口縁部「く」の字状に大きく外反し、端部を平坦に仕上げる。体部内溜。	口縁部内外面回転ナデ。体部内面青海波文の叩き。凹外面薬目状の叩き後、横方向のカナ目を実施す。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	

番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
131	須恵器 甕	口径 (32.8) 残存高 6.6	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に大きく外反、口縁端部わずかに拡張。	口縁部内外面回転ナデ。体部内面青油塗文の明きをナデ消す。両外面にカキ目を施す。	灰色	砂粒を少量含む。	やや不良	体部内面に自然釉がかかる。
132	須恵器 甕	口径 (30.7) 残存高 3.2	口縁部大きく外反し、端部わずかに拡張。端面は凹面となる。	摩耗により調整不明。	灰白色	砂粒を少量含む。	不良	
133	須恵器 甕	口径 (32.4) 残存高 3.0	口縁部大きく外反し、端部上下に拡張。端面はわずかに丸みを持つ。	口縁部内外面回転ナデ。両外面回転ナデ後、部分的に縦方向のナデを施す。	外面帯灰色、内面灰色	微砂粒を多く含む。	良好	外面に自然釉がかかる。
134	須恵器 甕	口径 (20.6) 残存高 3.2	口縁部の破片。口縁部大きく外反。端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面回転ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	口縁部内面自然釉がかかる。
135	須恵器 甕	口径 (31.2) 残存高 3.5	口縁部の破片。口縁部外反し、端部を水平に引き出す。口縁部外面に突起状の突部を削り出す。	口縁部内外面回転ナデ。	灰色	精良	良好	
136	須恵器 甕	口径 (32.0) 残存高 6.9	口縁部大きく外反し、端部を尖らせる。口縁部外面に突起状の突部を削り出す。	外面回転ナデ。内面摩耗により調整不明。	灰色	砂粒を少量含む。	やや不良	
137	須恵器 高杯 (脚部)	残存高 7.8	脚部はほぼ垂直に立ち、脚下部が闊く。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
138	須恵器 高杯 (脚部)	脚底径 (18.5) 残存高 3.0	脚部で大きく外方に開く。脚端部を拡張し、端西を凹面に仕上げる。	全体に回転ナデが施されるが、外面のナデははやや粗雑である。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
139	須恵器 把手	長さ 2.5 幅 2.6 厚さ 1.3	把手部のみ破片。基部から大きく上方に屈曲させる。先端部は丸い。	粘土塊を指で積み出して成形後貼り付ける。器内面からも強く圧迫する。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
140	須恵器 把手	長さ 4.2 幅 3.1 厚さ 1.7	把手部のみ破片。水平に折り出した後、上方に屈曲させる。先端部は丸い。	粘土塊を指で積み出して成形後貼り付ける。器内面からも強く圧迫する。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
141	土師器 杯	底径 (7.0) 残存高 2.1	体部斜め上方に直線的に延びる。底部は平底。	底部内面回転ナデ。同外面磨耗により調整不明。	灰褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
142	土師器 杯	底径 (8.1) 残存高 2.0	底面のみ残存。底部平底。体部わずかに内湾か。	底部へラ切り後丁寧なナデ。	黄褐色	砂粒を少量含む。	良好	
143	土製品 土罎	残存長 2.3 胴径 0.8 重さ 1.0g	紡錘形の管状土罎。小形。	全体にナデを施す。	黄褐色	精良	良好	
144	土製品 土罎	残存長 3.8 胴径 1.0 重さ 3.4g	紡錘形の管状土罎。	全体にナデを施す。	黄褐色	精良	良好	

表7 溝1出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
145	須恵器 杯蓋	残存高 2.2 胴み径 2.8 胴み高 1.6	高めの空錐形の筒みが付く。	回転ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
146	須恵器 杯蓋	残存高 1.3 胴み径 2.9 胴み高 0.6	天井部外面中央部に扁平な筒みが付く。天井部は平坦とみられる。	回転ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
147	須恵器 杯身	口径 (10.8) 残存高 3.5	体部わずかに内湾しながら急激に立ち上がり、やや外反する口縁部に縁く。断面方形の低い高台が付く。	全体に回転ナデ。	緑灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
148	須恵器 杯身	口径 (13.0) 残存高 3.8	体部はゆるやかに内湾して上方に延び、口縁部はやや肥厚して、腰部は丸く仕上げられる。器内溝あり。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
149	須恵器 杯身	高台径(8.9) 残存高 1.4	断面方形の低い高台が付く。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
150	須恵器 杯身	高台径(10.0) 残存高 1.0	断面方形の扁平な高台が付く。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
151	須恵器 杯身	高台径(11.3) 残存高 1.8	断面方形の低い高台が付く。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
152	須恵器 杯身	高台径(11.3) 残存高 2.0	断面方形の低い高台が付く。高台量付け高回転状の凹みが入る。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
153	須恵器 杯身	高台径(12.0) 残存高 1.7	高台部の細片。断面方形で、臺付け部がやや押しつぶれた低い高台が付く。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
154	須恵器 壺(底部)	高台径(12.1) 残存高 2.7	断面方形で安定した高台がやや外方に陥入張る。底部の器肉厚い。	全体に回転ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
155	須恵器 壺	残存高 2.5	小造の体部から肩部にかけての破片で、肩部は大きく外方に張り出す。	全体に丁寧な回転ナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	外面に自然釉がかかる。
156	須恵器 壺	口径(24.8) 残存高 3.7	口縁部「く」の字状に屈曲し、縮部をわずかに拡張する。	口縁部内外面回転ナデ。	青灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
157	土師質 羽釜	口径(17.2) 残存高 3.4	口縁部わずかに内湾気味で、縮部は丸い。断面方形の脚が水平に張り出す。	口縁部外面・脚部ヨコナデ。内面摩耗により調整不明。	灰白色	砂粒を多く含む。	やや不良	
158	須恵質 脚部	残存長 7.0 径 2.7	断面円形。	全体にヘラケズリ後丁寧なナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量(m)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
159	須恵質陶器 こね鉢	口径(21.5) 残存高 2.5	口縁部わずかに内湾し、端部を尖り 気みに仕上げる。端面はわずかに丸 みを帯び。	全体に回転ナデ。	灰色	砂粒を多 く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
160	須恵質陶器 こね鉢	口径(30.7) 残存高 3.0	口縁部わずかに外反気味で、端部を 上下に大きく拡張する。	全体に回転ナデ。	青灰色	砂粒を多 く含む。	良好	魚住焼。
161	須恵質陶器 こね鉢	口径(35.4) 残存高 3.5	口縁部わずかに内湾し、端部を上下 に大きく拡張する。	全体に回転ナデ後、内面仕 上げナデ。	灰色	砂粒を多 く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
162	弥生式土器 口縁部	口径(23.9) 残存高 1.4	口縁部の細片で、全体の形状不明。 端部は上方に大きく積み上げる。	全体にヨココナデ。	淡褐色	砂粒を少 量含む。	良好	

表3 包含層出土中世遺物観察表

番号	器種	法量(m)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
163	土師質土器 鉢	口径(10.2) 器高 4.2 底径(7.3)	体部ほぼ直線的に斜め上方に延び、 口縁部との境界付近でわずかに屈曲 して口縁部に続く。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面 以外回転ナデ。	赤褐色	砂粒を少 量含む。	良好	
164	土師質土器 皿	口径(9.1) 残存高 2.2 底径(6.0)	体部直線的に大きく外方に開き、や や外反する口縁部に続く。口縁端部 は丸い。	底部回転糸切り。底部外面 以外回転ナデ。	黄褐色	精良	良好	
165	土師質土器 皿	口径(7.2) 器高 1.8 底径(4.9)	体部から口縁部にかけてほぼ直線的。 口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。	底部回転糸切り。底部外面 以外摩耗により調整不明。	淡赤褐色	赤砂粒を 少量含む。	良好	
166	土師質土器 皿	口径(7.0) 器高 1.8 底径(5.6)	体部・口縁部短く、直線的に斜め上 方に延び、端部を尖り気味に仕上げ る。	底部回転糸切り。底部外面 以外回転ナデか。	淡赤褐色	赤砂粒を 少量含む。	良好	

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
167	土師質土器 皿	口径 (8.1) 器高 1.3 底径 (7.5)	体部・口縁部短い。口縁端部の断面は三角状で、肩部はやや尖る。底部の器内薄め。	底部回転糸切り。底部外面以外、摩耗により調整不明。	淡黄褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
168	瓦器 皿	口径 (8.1) 残存高 1.5	口縁部わずかに内湾し、肩部は丸い。器内やや厚め。	口縁部内外面ヨコナデ。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
169	須恵質陶器 すり鉢	口径 (20.7) 残存高 3.7	口縁部やや内湾し、肩部を上下に拡張。下部は垂下する。肩部はわずかに凹む。	口縁部内外面回転ナデ。内面に磨擦条痕を施すが単位不明。	赤灰色	最大 2mm の砂粒を含む。	良好	備前焼。
170	土師質土器 胴部	残存長 5.5 直径 1.8	胴部の末端部の断片で、断面はやや長円形を呈する。	摩耗により調整不明。	灰褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	

表9 石器計測表

番号	出土層位	現長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	面積 (cm^2)	石材	備考
1	包含層	55.0	18.0	7.0	5.3	サマカイト	
2	土坑 3	80.0	31.0	8.2	33.8	結晶片岩	
3	同上	97.8	41.4	8.6	59.1	同上	
4	同上	106.5	45.3	8.0	90.0	同上	
5	同上	86.6	39.5	4.6	27.0	同上	
6	同上	57.0	30.9	5.2	13.6	同上	
7	同上	104.6	45.1	10.5	70.1	同上	
8	同上	100.9	40.4	6.1	98.7	同上	
9	同上	94.1	53.8	10.1	75.7	サマカイト	
10	同上	31.1	14.7	4.2	1.9	同上	有蓋
11	同上	31.8	19.2	5.5	2.9	同上	同上
12	同上	30.8	16.8	6.5	2.4	同上	同上
13	同上	49.4	15.3	6.4	4.2	同上	同上
14	同上	33.1	17.7	4.5	3.1	同上	
15	同上	41.7	31.3	6.6	5.9	同上	
16	同上	58.8	19.8	5.3	7.6	同上	
17	包含層	21.2	13.1	2.7	0.7	同上	有蓋
18	同上	28.5	16.9	5.6	2.7	同上	同上
19	同上	27.5	12.8	4.5	1.9	同上	同上
20	同上	34.4	17.0	7.9	3.1	同上	同上
21	同上	38.6	19.7	4.3	0.7	同上	同上
22	同上	39.4	18.5	4.4	2.9	同上	同上
23	同上	38.0	21.0	4.7	3.9	同上	同上
24	同上	39.7	22.0	5.0	3.5	同上	同上
25	同上	44.0	23.8	4.9	5.0	同上	同上
26	同上	48.1	25.5	6.6	5.2	同上	同上
27	同上	17.5	12.0	3.2	0.5	同上	無蓋
28	同上	17.0	12.5	3.8	0.5	同上	同上
29	同上	19.2	11.9	3.7	0.7	同上	同上
30	同上	19.9	13.1	3.1	0.7	同上	同上
31	同上	13.3	17.1	2.8	0.5	同上	同上
32	同上	19.1	12.4	3.2	0.7	同上	同上
33	同上	14.0	21.1	3.6	1.0	同上	同上
34	同上	14.9	10.5	2.3	0.5	同上	同上
35	同上	18.0	12.8	2.9	0.6	同上	同上
36	同上	21.5	13.8	5.0	1.2	同上	同上
37	同上	19.2	16.0	4.0	1.1	同上	同上
38	同上	16.8	9.7	3.1	0.6	同上	同上
39	同上	20.3	15.3	5.3	1.4	同上	同上
40	同上	16.9	17.7	4.8	0.9	同上	同上
41	同上	18.0	13.0	3.0	0.6	同上	同上
42	同上	18.0	15.7	3.5	1.0	同上	同上

番 号	出土層位	規 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 さ (g)	石 材	備 考
43	包 含 層	23.9	16.5	2.6	0.8	サマカイト	無 蓋
44	同 上	26.0	16.4	4.0	1.2	同 上	同 上
45	同 上	23.8	18.4	4.5	2.0	同 上	同 上
46	同 上	14.0	14.0	2.5	0.6	同 上	同 上
47	同 上	17.6	16.1	4.0	1.1	同 上	同 上
48	同 上	13.6	18.3	3.6	0.9	同 上	同 上
49	同 上	19.4	17.9	4.2	1.2	同 上	同 上
50	同 上	23.1	21.7	4.9	1.6	同 上	同 上
51	同 上	19.9	16.3	3.8	1.1	同 上	同 上
52	同 上	20.5	7.9	2.3	0.7	同 上	同 上
53	同 上	20.5	11.2	3.2	0.6	同 上	同 上
54	同 上	25.3	13.1	2.8	0.9	同 上	同 上
55	同 上	30.3	20.5	4.2	2.2	同 上	同 上
56	同 上	24.6	22.4	5.2	3.3	同 上	同 上
57	同 上	21.5	15.7	3.6	1.2	同 上	同 上
58	同 上	28.3	18.7	5.0	3.3	同 上	同 上
59	同 上	18.3	13.8	4.0	0.8	同 上	同 上
60	同 上	14.9	15.0	2.9	0.6	同 上	同 上
61	同 上	14.7	18.3	3.7	0.7	同 上	同 上
62	同 上	18.2	15.9	4.3	0.8	同 上	同 上
63	同 上	23.0	16.7	4.6	1.0	同 上	同 上
64	同 上	28.5	16.5	4.1	1.0	同 上	同 上
65	同 上	22.0	10.5	3.7	0.5	同 上	同 上
66	同 上	19.8	16.5	3.7	0.8	同 上	同 上
67	同 上	22.4	8.0	3.6	0.8	同 上	同 上
68	同 上	21.2	15.3	4.8	1.1	同 上	同 上
69	同 上	15.5	16.6	2.5	0.6	同 上	同 上
70	同 上	16.1	17.0	2.9	0.5	同 上	同 上
71	同 上	19.4	14.4	3.3	0.6	同 上	同 上
72	同 上	12.8	16.2	3.5	0.6	同 上	同 上
73	同 上	26.3	17.7	3.7	1.2	同 上	同 上
74	同 上	18.3	14.8	3.4	0.6	同 上	同 上
75	同 上	14.3	16.7	2.7	0.6	同 上	同 上
76	同 上	40.1	35.8	7.7	18.4	結晶片岩	
77	同 上	69.0	49.0	8.9	35.2	同 上	
78	同 上	110.5	42.0	4.5	32.3	同 上	
79	同 上	68.1	38.9	11.0	27.9	サマカイト	
80	同 上	29.0	26.0	9.1	6.0	同 上	
81	溝 1	25.0	17.0	4.4	1.7	同 上	無 蓋
82	同 上	18.8	15.1	2.9	0.7	同 上	同 上
83	同 上	27.2	17.1	5.9	4.5	同 上	
84	同 上	54.8	36.5	10.3	21.4	同 上	

圖 版

図版1 調査区全景



(1) 調査前の状況



(2) 調査終了時の状況

图版 2 遺構検出状況(1)



(1) 土坑3 集石検出状況

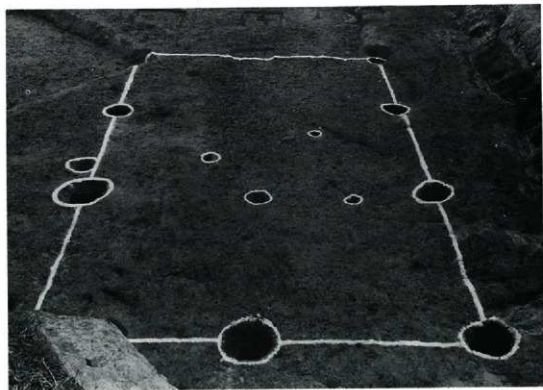


(2) 土坑3 完掘状況

図版3 遺構検出状況(2)



(1) 掘立柱建物跡(遠景)



(2) 掘立柱建物跡(近景)

図版4 遺構検出状況3)



(1) 溝1 完掘状況



(2) 土坑4 完掘状況

図版5 遺構に伴う遺物出土状況(1)



(1) 土坑3 出土弥生式土器



(2) 土坑3 出土石包丁



(1) 柱穴内出土土師器



(2) 土器だまり出土須恵器

図版7 包含層遺物出土状況(1)



(1) ナイフ形石器



(2) 石片

図版 8 包含層遺物出土状況(2)

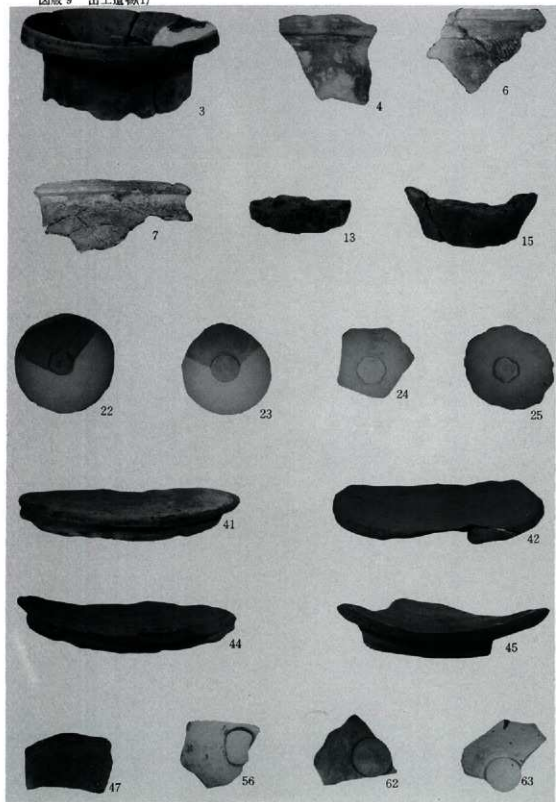


(1) 東壁沿いの遺物



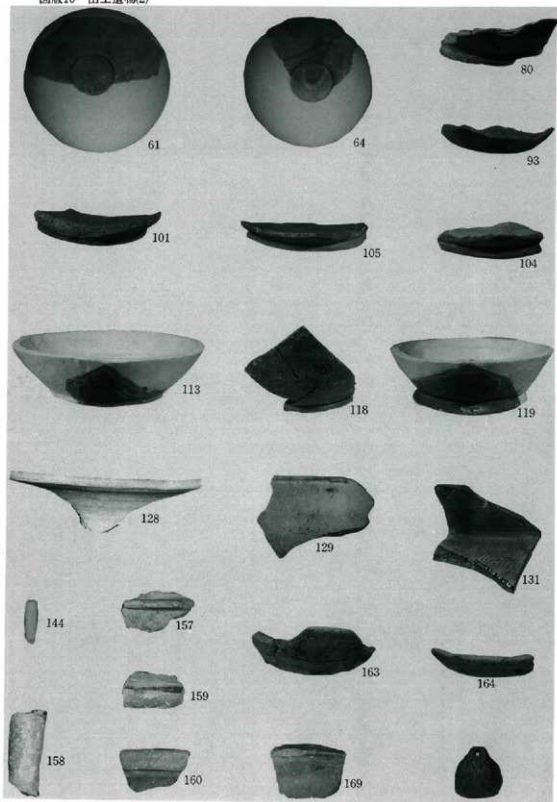
(2) 異形須恵

図版9 出土遺物(1)



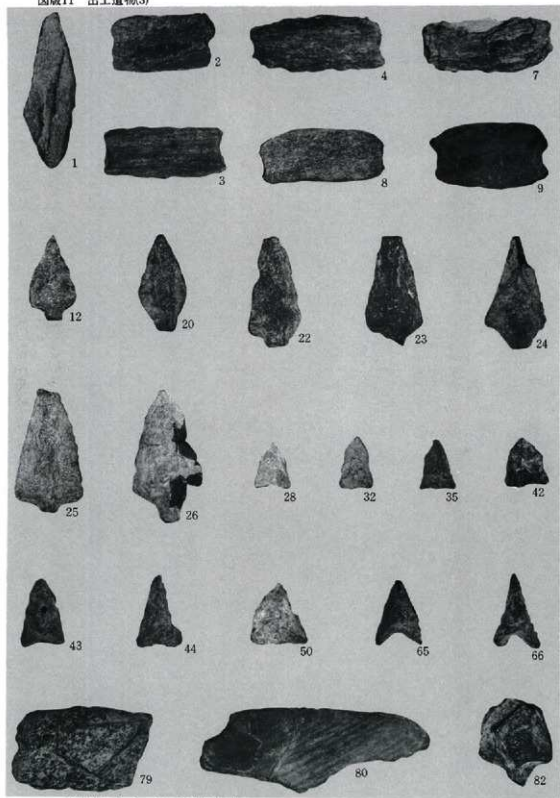
3～7(土坑3), 13・15(包含層), 22～47(土器だまり), 56～63(包含層)

図版10 出土遺物(2)



61~144(包含層), 157~160(溝1), 163~169(包含層), 異形須恵(包含層)

図版11 出土遺物(3)



2~9(土坑3) 1・12~82(包含層)

県道船戸切幅上板線改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

土成前田遺跡

発行年月日 平成元年3月31日
編集・発行 徳島県教育委員会
徳島市万代町1丁目1
印 刷 徳島教育出版センター
徳島市川内町平石流通団地